

# 井伏鱒二「一路平安」〈今日の問題社版〉・〈有光名作選集版〉 本文推移一覧

前田 貞昭

## はじめに

井伏鱒二「一路平安」の初出は、南満洲鉄道株式会社（満鉄）の資本傘下にあった日本語新聞『満洲日日新聞』朝刊である。連載回数は合計一五九回（途中四回の休載を挟む）、一九三九〔昭和十四〕年一月一日から六月十三日までおよそ半年間に及ぶ連載であった。

連載完結から一年有余後の一九四〇〔昭和十五〕年九月五日に、今日の問題社から連載時と同じ『一路平安』の標題で単行本として刊行され、翌一九四一〔昭和十六〕年には同じ版元から〈普及版〉が出版される。さらにその翌年の一九四二〔昭和十七〕年には〈有光名作選集〉の一冊として上梓される。

このように新聞連載の翌年から毎年体裁を換えて『一路平安』は出版されていたのだが、生前の井伏は〈有光名作選集〉を最後として「一路平安」と

いう作品に目の目を見ることを許さず、作品集・個人全集・文学全集にも再録することはなかった。

初刊『一路平安』の書誌的事項を次に掲げておく。

『一路平安』（〈今日の問題社版〉あるいは『今日』と略記）

今日の問題社（東京市芝区田村町四丁目十八番地）、一九四〇〔昭和十五年〕年九月二日印刷、一九四〇〔昭和十五年〕年九月五日発行、定価二百五十銭（外地定価二百七十五銭）、発行者・伊藤隆文（東京市芝区田村町四丁目十八番地）、印刷所・青野印刷所（東京市芝区田村町四丁目二番地）、印刷人・記名無し、四六判、紙装、上製、丸背、函付き〔未確認〕、装丁及び挿画・吉田貫三郎、本文九ポイント、四十六字×十七行、ルビなし、全三七九頁。

この〈今日の問題社版〉には、先に述べたように一九四一〔昭和十六〕年五月五日印刷、一九四一〔昭和十六〕年五月八日発行、定価一百八十銭（外地定価一百九十八銭）の普及版がある。普及版の函の有無は確認していない

が、本体の装丁・挿画は元版と相違はなく、前附・本文も元版の紙型を使用しているとおぼしい<sup>〔注〕</sup>。奥附の標題下に「〈普及版〉」とあることで〈元版〉とは見分けられる。巻末広告も〈元版〉では奥附裏から三頁に亘って掲載されているのに対して、〈普及版〉では奥附裏の一頁に留まっている。

〈普及版〉の翌年に出た『一路平安』〈有光名作選集〉は次のようなものであった。

『一路平安』〈有光名作選集十四〉「〈有光名作選集版〉あるいは『有光』と略記」

有光社（東京市麹町区丸の内三ノ八）、一九四二〔昭和十七〕年二月十日印刷、一九四二〔昭和十七〕年二月十五日発行、定価一円三十銭、発行者・村田利吉（東京市麹町区丸の内三ノ八）、印刷者・合資会社同興舎（東京市神田区神保町一ノ三三）、印刷人・井波豊、配給元・日本出版配給株式会社、B 6判、紙装、並製、角背、装丁・吉田貫三郎、本文九ポイント、四十三字×十五行、ルビなし、全三三三頁。

初出『満洲日日新聞』連載本文と『一路平安』（今日の問題社・元版）所載本文との「主な異同」については、既に『井伏鱒二全集』第八卷（筑摩書房、一九九七年四月二十日）「解題」に掲げられている。

本稿で取り上げるのは、〈今日の問題社版〉と〈有光名作選集版〉との本文異同である。

何点かの井伏作品においては、初刊本の段階で、新聞・雑誌発表時のノイズが取り除かれると同時に、表現・表記が洗練・整備されて、一応の完成に至るように見える。

『井伏鱒二全集』第八卷「解題」が示すように、「一路平安」も初刊（今日の問題社版）の段階で、連載複数回に及ぶ削除がなされ、また、内容

substantives に関わる文・字句単位の手入れや、人名・地名などの整序が行なわれている。ここで、同時に用語・用字などの表記 accidentals の整齊も行なわれているだろう、と期待される。ところが、〈今日の問題社版〉は、そのような本文を提供していないようなのである。

一々の本文推移を全体との関連において考察する余裕がない。本稿では、本文の推移を一覧のかたちで報告する。

各章の見出しについて述べておく。〈今日の問題社版〉は全十八章の構成で、各章に半扉（改丁。中扉と違って裏面から本文を始める）を置き、そこに吉田貫三郎の挿画を入れている。〈有光名作選集版〉は各章に固有の名称を附さず「第一齣」に始まり「第十五齣」で終わる「齣」という名称で分割する。齣を改めて改丁・改頁はせず、本文中に四行取りしてその中央に十二ポイント活字で「第一齣」以下の章見出しを配している。

『満洲日日新聞』・〈今日の問題社版〉・〈有光名作選集版〉以上、三つの本文が章節単位では、どのような対応関係にあるかということについて、削除箇所を中心にまとめた「表一 連載複数回に及ぶ異同一覧」を次頁に掲げる。

注1、例えば元版・普及版ともに「21」とあるべきノンブルが「12」と一の位と十の位が逆順になっている。また、ノンブル「347」の下二桁の「47」が、両者ともに少し右に傾いたままだ。一三三頁十三行目の行頭「き」の、四分の三ほどが消えている。一五三頁三行目冒頭の二重鉤括弧が「』」と横転している。三二八頁八行目の二重鉤括弧受けが「『』」と誤植されている。いずれも同じ紙型を利用した現象だと推定される。

表一 連載複数回に及ぶ異同一覧

満洲日日新聞	今日の問題社版	有光名作選集版
1回～9回 閑吟塾1～9		
1回 閑吟塾1(3段目途中迄)	閑吟塾 序章[4字下げ]	8ポ、4字下げ
1回 閑吟塾1(3段目途中～末尾)	} 閑吟塾[本文]	1齣
2回～9回閑吟塾2～9		
10回～18回 オロシヤ船1～9	オロシヤ船	2齣
19回～25回 文錦堂さん1～7	文錦堂さん	3齣
26回～30回 深夜のこと1～5	深夜のこと	4齣
31回～41回 伝写の夜1～10		
31回～35回 伝写の夜1～5	} 転写の夜	5齣
36回 伝写の夜6		—
37回 伝写の夜7(3段目途中迄)		—
38回 伝写の夜8(3段目途中～末尾)		} 5齣
39回～41回 伝写の夜9～11		
42回～51回 移風易俗の章1～11		
42回～47回 移風易俗の章1～7	} 移風易俗の章	} 6齣
48回 移風易俗の章8(前半)		
48回 移風易俗の章8(後半)		
49回～51回 移風易俗の章9～11		
52回～65回 献策1～14	献策	7齣
66回～73回 早打の注進1～8	早打の注進	8齣
74回～82回 唐畳のお座敷1～9	陶畳のお座敷	—
83回～89回 叢書長屋1～7	草書長屋	9齣
90回～99回 ヤエ(エ)ノ1～10	ヤエ(エ)ノ	—
100回～107回 似顔絵1～8		
100回～104回 似顔絵1～5	似顔絵	—
105回～107回 似顔絵6～8	—	—
108回～115回 オロシヤ船探訪1～8	—	—
116回～125回 駄舌問答1～10	駄舌問答	10齣
126回～134回 仙台漂民1～9	仙台漂民	11齣
135回～143回 災厄1～9	災厄	12齣
144回～148回 離合1～5	離合	13齣
149回～155回 十五夜1～7	十五夜	14齣
156回～159回 学而篇第一1～4	学而篇第一	15齣

—は削除を示す。

## 凡例

一、〈今日の問題社版〉と〈有光名作選集版〉との間で異同が認められる本文（誤植の継承と思われるものも含む）を、その出現順に掲げた。その際、〈今日の問題社版〉の各齣を【】に括って見出しとし、異同の所在箇所を示す便宜とした。【】の下に〈今日の問題社版〉掲載頁及び掲載総頁数を添えた。

『満洲日日新聞』も参照し、該当部分において、〈今日の問題社版〉と『満洲日日新聞』との間で全く異同がない場合は△で示し、該当回・段を附した。但し、ルビ（『満洲日日新聞』はパラルビだが、多用する）・送り仮名・用字について『満洲日日新聞』本文が参考となり得る箇所は△に続いて『満洲日日新聞』本文を引用した。次のような体裁である。

〈今日の問題社版〉本文（該当頁・行）△『満洲日日新聞』〔場合に  
よつては『満洲日日新聞』本文を掲げる〕（該当回・段）↓〈有光名  
作選集版〉本文（該当頁・行）

〈今日の問題社版〉と『満洲日日新聞』との間で異同がある場合は▲に  
続いて『満洲日日新聞』本文を引用し、該当回・段を附した。次のような  
体裁である。

〈今日の問題社版〉本文（該当頁・行）▲『満洲日日新聞』本文（該  
当回・段）↓〈有光名作選集版〉本文（該当頁・行）

但し、扉・章見出しに関わる『満洲日日新聞』との異同は省いた。  
『満洲日日新聞』本文を引用する際、ルビは原則として省略したが、他  
の本文との異同に関わる可能性のある箇所は残した。

紙幅の関係で『満洲日日新聞』は『満日』と記し、既に断わったように

〈今日の問題社版〉は『今日』、〈有光名作選集版〉は『有光』と略記し  
た。

『満洲日日新聞』第二十二回は原紙を見ることが出来なかったので、そ  
の異同は掲出していない。

いずれの場合も、章名などの見出しは行数に数え、行空きは行数には含  
めなかった。なお、扉などで行数を数えなかったところは、行を示さずに  
（3頁）などと「頁」の文字を附した。

二、必ずしも厳密なものではないが、推移の内容を便宜的に分類し、当該箇  
所引用の最初に次のような符号を置いた。

## ○左記以外

◎語順の入れ換え〔入れ換えに伴う微細な字句の異同も含む〕

×誤植の訂正・継承・発生

a 仮名遣いの異同〔bを除く〕

b 仮名の清濁の異同

c 送り仮名の異同

d 漢字と仮名との置換〔fを除く〕

e 漢字表記の異同〔fを除く〕

f 地名・人名・職名・船名などの異同

g 句読点の異同

h 行空き・改行・追い込みの異同

三、〔e 漢字表記の異同〕に関しては、字形のデザイン差と考えられる、  
「吞／呑」「叱／叱」は取り上げなかった。また、異体字関係にあって、  
それぞれの本文では同一の字体を一貫して使用している「並／並」「即／

即「衛／衛」のようなものは取り上げなかった。但し、一つの本文で複数の字体を併用している場合は掲載した。例えば〈今日の問題社版〉では全て「鬱」と使っているが、〈有光名作選集版〉では〈今日の問題社版〉の「鬱」に対して、「鬱」とする箇所と「鬱」を使う箇所がある。これを一つの本文で複数の字体を併用していると見た。

四、推移が分かりやすいように、〈今日の問題社版〉本文と〈有光名作選集版〉本文については、両者の間で異同の生じている箇所や注意したい箇所  
に傍線を施し、あるいは「  」印を入れた。但し、「◎語順の入れ換え」に関しては傍線や「  」印は入れなかった。

五、／は改行を示し、□は一字分の空白を示す。■は該当箇所の一字分が判読できないことを示す。前田の注記等は「  」で括った。なお、「  」内で本文を引用する際は「  」で括った。

六、本文の引用に際して、漢字は原則として常用漢字に改めたが、特に注意を惹くところについては、原文の字体・字形をそのまま生かした。

七、組版原則が異なる結果生じた、次のような異同は、ここに取り上げなかった。

- ・ 〈今日の問題社版〉は会話などの引用に二重鉤括弧『』を用い、『満洲日日新聞』〈有光名作選集版〉は一重鉤括弧「」を用いている。また、段落の初めにくる改行の行頭の起こしの鉤括弧を、〈今日の問題社版〉は見た目二分下がり  
で組み、〈有光名作選集版〉は見た目全角二分下がり  
に組み。これらの行頭の鉤括弧類の異同。
- ・ 平仮名の繰り返し符号「  」「  」の使用に関する異同。
- ・ 「  」「  」直後の処理の異同。現在の組版ルールでは「  」の後は一桁空きとし、句読点と重ねて使用しないのだが、

『満洲日日新聞』では、それに反するところがある。〈今日の問題社版〉〈有光名作選集版〉はそれらの箇所を修正する。

八、行末の読点を略したとも解し得るところ、また、そのような処理に関わって参考となり得るところには、「  」を附した。

【「見出しの文言なし」】3頁～4頁 合計2頁

○閑吟塾（半扉 吉田貫三郎画）（3頁）↓「なし」 「『今日』の目次・章見出しでは「閑吟塾」と表記されるが、『今日』の作品本文では、誤植として掲出した5箇所を除いて「閑吟塾」とする。」

○序章（4・1）▲間吟塾（1・1）↓「なし」（3・1直前。3頁1行目から4頁末尾まで本文は8ポイントで小さく組む）

○法令である。（4・3）△（1・1）↓厳しいお達しである。（3・1）

2）

○＜法令である。（4・5）△（1・1）↓幾らか緩和された趣きの法令である。（3・3）

○＜長崎にだけ立ち寄るものと定まつてゐた。（4・6～7）△（1・1）↓必ず長崎にだけ立ち寄るべき筋合ひのものと定まつてゐた。（3・4）

5）

○そして＜異国船が（4・7）△そして一異国船が（1・1）↓そして万一同異国船が（3・5）

○一も二もなく退去させよう（4・7～8）△（1・1）↓一も二もなく引きとつて行つてもらほう（3・5～6）

○それは幕府の全能を動員しても法令を厳しく改めても、＜どうすることも（4・10～11）△（1・1）↓幕府の全能を動員しても法令を厳しく

改めて、それはどうすることも(3・8)

d 到頭(5・1) △(1・1) ↓とうとう(3・11)

○文化元年甲子九月四日(5・1・1) △文化元年甲子九月四日(1・1)

↓文化元年九月四日(3・11)

○届け出である。(5・4) △(1・1) ↓届け出であつた。(4・2)

○長崎奉行所の驚駭は只ごとではない。<(5・10) △(1・2) ↓長崎奉行所の驚駭は只ごとではない。もう抜き差しならないのである。(4・7)

7)

◎e 即刻、配下の手兵に出陣の下知をくだし、その館の門前に幔幕を張りめぐらした。(5・10) △(1・2) ↓即刻その館の門前に「幔」幕を張りめぐらし、配下の手兵に出陣の下知をくだした。(4・7・8)

「『有光』では「幔」が空白になっているようにも見えるが、ここでは仮に「幔」としておいた」

e 足並みそろへて駆け足で(5・12) △(1・2) ↓足並みそろへて駆け足で(4・9) 「『角川 新字源』<sup>1124</sup>頁は「駈」を「驅」の俗字とする。

『新潮日本語漢字辞典』722頁は「駈」を「驅」の別体とする。『明朝体活字字形一覧』下は596頁と599頁とに「駈」・「驅」を別々に掲出する。ただし、「驅」字は二十三種類全ての活字見本帳に掲げられているが、

「駈」字は十五種類の活字見本帳にはあるが、残る八種には見えない。

『漢字要覧』28頁〜29頁では「元来同一ノ文字ナレドモ、字体ノ異ナルニ因ツテ、ソノ用例同ジカラズ、殆ド別種ノ文字ノ如クナルモノアリ」として挙例された中に「驅」と「駈」とがあり、それぞれの用例として「馳驅／驅逐」・「駈足／駈落」を掲げている。『用字便覧 陸軍幼年学校用』390頁には「今ハ多ク驅使・驅逐ニ驅ヲ用ヒ、駈足ナドニ駈ヲ用フ」

とある」

e 大通りを駆けぬけた。(5・12) △(1・2) ↓大通りを駆けぬけた。(4・9)

g 大筒船は、帆を張る用意をととのへて、(5・15) △(1・2) ↓大筒船は、帆を張る用意をととのへて、(4・11・12)

○役人たちはそれぞれ血相を変へて海岸通りを(5・16・17) △(1・2) ↓役人たちはみなみな血相を変へ、海岸通りを(4・12・13)

○港口の方に向け、馬を駆けさした。(5・17) △(1・2) ↓港口の方に向け、馬を駆けさした。(4・13)

○『控へろ、控へろ! 大事な、騒ぐな!』(6・3) ▲「控へろ、控へろ! 大事な、騒ぐな!」(1・3) ↓「控へろ、控へろ。大事な、騒ぐな!」(4・15)

【第一齣】5頁〜26頁 合計22頁

○「なし」 「三行分空白」 (6・5・6間) ▲「通常の改行。見出し・行空きなどはない」(1・3) ↓第一齣(5・1)

○まだお昼すぎだといふのに、雨戸をしめきつてゐた。(6・6・7) △まだお昼すぎだといふのに、雨戸をしめきつてゐた。(1・3) ↓もうお昼すぎだといふのに、まだ雨戸をしめきつてゐた。(5・2・3)

d 細めに明けた高窓(6・7) △(1・3) ↓細めに明けた高窓(5・3) ◎見おろして、／『先づもつて、騒がしさうなことぢや』／苦々しげに呟いた。(6・9・11) ▲見おろして、／「先づもつて、騒がしさうなことぢや」／と呟いた。(1・3) ↓見おろして苦々しげに呟いた。／「先づもつて、騒がしさうなことぢや」<(5・5・6)

a 鶴賓先生は顎の先きの山羊髭を高窓の雨押へにのぞかして、ぢつと水の浦陣所の方を(6・12ゝ13) ▲鶴賓先生は顎の先きの山羊髭を高窓の雨押へにのぞかしてぢつと水の浦陣所の方を(2・1) ↓鶴賓先生は顎の先きの山羊髭を高窓の雨押へにのぞかして、じつと水の浦陣所の方を(5・7ゝ8) 「『辞苑』<sup>1757</sup>頁には「上唇のを髭(うはひげ)、頤のを髭(したひげ)、頬のを髯(したひげ)」といふ。」とある。『用字便覧 陸軍幼年学校用』<sup>237</sup>頁には「髭」は「鼻下ノヒゲ」、「髯」は「両頬のヒゲ」、「鬚」は「頤下のヒゲ」とある」

◎先生のその顔は(6・13) △(2・1) ↓その先生の顔は(5・8)

g 水の浦陣所には、大筒船や小早船や東海船が勢揃ひして、(7・1) △(2・1) ↓水の浦陣所には、大筒船や小早船や東海船が勢揃ひして、(5・10)

○一艘の小型の早船は帆を揚げてゐた。(7・1) △(2・1) ↓一艘の小型の早船が艀を漕ぎ出してゐた。(5・10ゝ11)

○c g 陣所の石垣の下を離れ、港内のお台場の方角に向かつて進み出た。(7・5ゝ6) ▲陣所の石垣の下を離れ港内の伊王島の方角に向かつて進み出た。(2・1) ↓陣所の石垣の下を離れ、港内のお台場の方角に向かつて進んでゐた。(6・2ゝ3)

○a 街ぢう森閑としたやうに思はれた。(7・7) △(2・1) ↓街ぢうが森閑としたやうに思はれた。(6・4)

c 大筒船は周章めはてて帆を揚げたが、(7・8) △大筒船は周章めはてて帆を揚げたが、(2・1) ↓大筒船は周章めはてて帆を揚げたが、(6・5)

d 帆を卸した。(7・8) △(2・1) ↓帆をおろした。(6・5ゝ6)

○おそらく一発の大筒の音は、異国船が入港の儀礼として発射した空砲であ

つたことに(7・8ゝ9) △(2・1ゝ2) ↓おそらくその大筒の音が、異国船の発した礼儀上の空砲であつたことに(6・6)

○空砲ならば大事な。<(7・9ゝ10) △(2・2) ↓空砲ならば大事な。このぶんでは直ぐに戦争もなさうだが、異国船はたくさんの大筒を積んで物々しく武装してゐるとの噂である。(6・7ゝ8)

○異国船の姿は岬のかげにかくれて(7・10) △(2・2) ↓異国船の姿は崖のかげにかくれて(6・9ゝ10)

d 障子や雨戸を明けひろげた。(7・11) △(2・2) ↓障子や雨戸をあけひろげた。(6・10)

×子供である。(7・12) △(2・2) ↓子供である。(6・11) 「『満日』『今日』の『』は誤植」

○鶴賓先生は驚いてゐた。(7・15) △(2・2) ↓鶴賓先生はむしろ驚いてゐた。(6・14)

e 床柱を脊せにして(7・17) △(2・2) ↓床柱を脊せにして(7・1)

g 見台の上に置き、ゆつくりと(8・1) △(2・2) ↓見台の上に置き、ゆつくりと(7・2)

○ひろげてゐた。(8・2) △(2・2) ↓ひろげた。(7・3)

○いきなり大きな声で(8・3) △(2・3) ↓先づ大きな声で(7・4)

○大きくよく響く太い音声であつた。(8・3ゝ4) ▲よく響く大きな太い音声であつた。(2・3) ↓太くよく響く声であつた。(7・4ゝ5)

×詩は、詩の郷関(8・5) △(2・3) ↓詩は、詩の郷関(7・6) 「いずれも『道の郷関』とあるべきところ」

g 発するものは、一道の道ならんと(8・5ゝ6) △(2・3) ↓発する

ものは、道の道ならんと」(7・6ゝ7)

○そして字句の解釈をするにも先生は声に抑揚をつけ、(8・7ゝ8) ▲そして先生は字句の解釈をするにも声に抑揚をつけ、(2・3) ↓次に先生は字句の解釈にとりかかったが、やはり声に抑揚をつけ、(8・8ゝ9)

×すなはち詩とは詩である、(8・9) △(2・3) ↓すなはち詩とは詩である、(7・10) 「いずれも『詩とは道である』とあるべきところ」

○納得できたかどうか(8・11) △(2・3) ↓納得できるかどうか(7・12)

○d 程門の二子の如くあらねばならぬ。(8・16) ▲程門の子二の如くあらねばならぬ。(2・4) ↓程門の二子のごとくなくてはならぬ。(8・3)

a 写本にぢつと目を(9・1) △(3・1) ↓写本にじつと(8・4)

e 薄い山羊髭(9・3) △(3・1) ↓薄い山羊鬚(8・6)

g 『されば』詩は真義の生みの親、(9・5) △(3・1) ↓「されば」詩は真義の生みの親、(8・8)

g 詩魂ある人もまた同じく事難に遭ふ。(9・6ゝ7) △(3・1) ↓詩魂ある人も、また同じく事難に遭ふ。(8・10)

g このとき詩は動き熱して真義を発し、(8・7) △(3・1) ↓このとき、詩は動き、熱して真義を発し、(8・10)

○g 詩を守らねばならぬ所以はそこにある、詩を失はば道を失ふ所以くまたそこにある。(9・7ゝ8) ▲詩を守らねばならぬ所以はそこにある、詩を失はば道を失ふ所以はまたそこにある。(3・1ゝ2) ↓詩を守らんければならぬ所以、そこにある。詩を失はば道を失ふ所以、またそこ

にある。(8・11ゝ12)

○道を念ずる所以にほかならぬといふことぢや』(9・9) △(3・2) ↓道を念ずる所業にほかならぬといふことぢや」(8・12ゝ13)

e g 続いて庭に駆け込んで来る(9・10) △(3・2) ↓続いて、庭に駆け込んで来る(8・14ゝ15)

e 庭を駆けぬけて行くのである。(9・11) △(3・2) ↓庭を駆けぬけて行くのである。(8・15ゝ9・1)

g その後ろから、同じく紺色の(9・11ゝ12) △(3・2) ↓その後ろから同じく紺色の(9・1)

e 役人が庭を駆けぬけて行き、(9・12) △(3・2) ↓役人が庭を駆けぬけて行き、(9・1)

d g 彼等は大きな足音をたてながら、一家の裏手に(9・12ゝ13) ▲彼等は大きな足音をたてながら、家の裏手へ(3・2) ↓彼等は大きな足音をたてながら家の裏手に(9・1ゝ2)

○『会釈もしないで、(9・14) △(3・2) ↓「会釈もせぬ、(9・3)

○裏庭の崖の鼻に立ち、(9・16) △(3・2) ↓裏庭の崖の突端に立ち、(9・5ゝ6)

×二人とも西陽をまぶしさうにして(9・17) △(3・2) ↓二人とも西陽まぶしさうにして(9・6) 「『有光』は『を』を誤脱か」

c 語く合つてゐた。(10・1) ▲話し合つてゐた。(3・3) ↓語り合つてゐた。(9・7)

○g どがんと喰らはせたらどんなものであらう』(10・2) ▲どがんと喰らはせたらどんなものだらう?」(3・3) ↓どがんと喰らはせたら、どんなものであらうな」(9・8)



○『はて、どんなものであらう。』(10・3)▲「はて、どんなものだらう。(3・3)↓「はて、どんなものであらうな。(9・8)

gこゝからだ」と大筒のたまは、(10・3)△(3・3)↓「ここからだ」と大筒のたまは、(9・9)

d届かぬかもしれぬ。(10・3)△(3・3)↓届かぬかも知れぬ。(9・9)↓10)

e仰言つたが、(10・4)△(3・3)↓仰有つたが、(9・10)○仮本陣にする(10・4)△(3・3)↓陣地にする(9・10)↓11)

○『貴公と拙者は、ただ仮本陣の陣地下検分役ぢや。(10・6)▲「しかしながら、貴公と拙者は、仮本陣の陣地下検分役ぢや。(3・3)↓「貴公と拙者は、ただ陣地下検分役ぢや。(9・12)

×続いて、和議、閉港、威信失墜、異人の横行闊歩。(10・7)↓8)▲続いて和議、閉港、威信失墜、異人の横行闊歩。(3・3)↓続いて、和議、閉港、威信失墜、異人の横行闊歩。(9・14)「いずれも「閉港」は「開港」とあるべきところ」

d流儀といふ事か』(10・10)△(3・4)↓流儀といふことか(10・2)

○c<異国船は島かげから姿を現くして、(10・13)▲異国船は、伊王島のかげから姿を現して(3・4)↓もはや異国船は島かげから姿を現はして、(10・3)

○その島を後ろに半里くらゐ(10・11)▲その島の沖半里くらゐ(3・4)↓その島を後ろに見せ半里くらゐ(10・3)

○船体の長さは五十石積みの二十倍以上もあらうと思はれた。(10・12)△(3・4)↓船体の長さは五十石積みの三十倍以上もあらうかと思は

れた。(10・4)↓5)

○大柱は三十間以上もあらうかと思受けられた。(10・13)△(3・4)↓大柱は三十間以上にも及ぶだらう。(10・5)

gすぎぬと申さるゝ、われわれにも左様に申せと申されてを。(10・17)▲「なし。当該部分は『今日』で加筆」(3・4に相当)↓すぎぬと申さるゝ、われわれにも左様に申せと申されてを。(10・9)

a血迷ふたことだのう』(11・2)▲「なし。当該部分は『今日』で加筆」(3・4に相当)↓血迷うたことだのう(10・11)

○h感にたへないかのやうに云ふのである。／「一行空き」／この崖の鼻にゐる二人の役人は、(11・6)↓8)▲感にたへないかのやうに云ふのである。／「第3回が終わり、第4回が始まる」間吟塾(四)／崖の鼻にゐた二人の役人は、(3・4)↓4・1)↓感にたへないかのやうに云ふのである。／この崖端にゐる二人の役人は、(10・15)↓11・1)

○ラクスマンのくオロシヤ船(11・9)△(4・1)↓ラクスマンの乗つて来たオロシヤ船(11・3)

○e g異国船に較べるといかに貧弱な(11・16)↓17)△(4・1)↓異国船に比べると、いかに貧弱な(11・9)↓10)

○郊迎してゐるかのやうな風情に見えた。(11・17)↓12・1)△(4・1)↓郊迎してゐるかのやうな風情に思はれた。(11・11)

○g進んで来て、大柱の帆を卸しく帆数を(12・2)▲進んで来ると、大柱の帆を卸し帆数を(4・2)↓進んで来ると、大柱の帆を卸し、帆数を(11・12)

d全部くり卸した。(12・4)△(4・2)↓全部くりおろした。(11・14)

○崖の鼻(12・5)△(4・2)↓崖の端(11・15)

g両手をおきく見台の方に向いて(12・7ゝ8)△両手をおき一見台の方に向いて(4・2)↓両手をおき、見台の方に向いて(12・2ゝ3)

×塾生たるもの傍見をたしり足を投げ出したりする(12・8ゝ9)▲塾生たるもの傍見をしたり足を投げ出したりする(4・2)↓塾生たるもの傍見をしたり足を投げ出したりする(12・3ゝ4)

○仁宗に上書く、大政は王道を(12・14ゝ15)△(4・3)↓仁宗に上書し、大政は王道を(12・10)

○大観元年七十五にて歿す。(12・17)▲大観元年七十五で歿す。

(4・3)↓大観元年七十五にして歿す。(12・12)

d目を注ぎ、(13・3)△(4・3)↓目をそそぎ、(13・1)

g『申さばく程先生は、(13・6)△(4・4)↓「申さば」程先生は、(13・4)

d去りながら、(13・9)△(4・4)↓さりながら、(13・7ゝ8)

○a本日はもう日も暮れてしまふた。(13・9ゝ10)▲本日はもう日も暮れてしまふた。(4・4)↓本日はもう日く暮れてしまふた。(13・8)

○お辞儀をして外に出た。(13・10)△(4・4)↓お辞儀をして坐を立つた。(13・8ゝ9)

○門の外に出てみると、いつの間に(13・10ゝ11)▲門の外に出てみるといつの間に(4・4)↓門の外へ出てみると、いつの間に(13・9)

g大雪が、地面二尺も(13・11)△(4・4)↓大雪がく地面二尺も(13・9)

○一段と声を落して述べた。(13・13)△(5・1)↓幾らか声を落して云つた。(13・12)

○崖の鼻(13・14)△(5・1)↓崖の上(13・13)

○見物さしてやりたい(13・13)△(5・1)↓見物させてやりたい(13・14ゝ14・1)

○儒学の大義はどこにあるのか(13・16ゝ14・1)▲儒学の大義はどこにあるのか(5・1)↓儒学の大義はどこにあるか(14・2)  
a云ふて見い(14・8)▲云つて見い(5・1)↓云うて見い(14・9)

d御座います(14・9)△(5・1)↓ございます(14・10)

c先生は殆んど満足さうに(14・10)△先生は殆ど満足さうに(5・1)↓先生は殆んど満足さうに(14・11)

○裏の崖の鼻に立つてをる(14・11ゝ12)△(5・1ゝ2)↓裏の崖の上に立つてをる(14・13)

a朱子学の大義を云ふてみい(14・13)▲朱子学の云つてみい(5・2)↓朱子学の大義を云うてみい(14・14)

○庄三郎の返答はく、時宜に適してをる。(14・17)△(5・2)↓庄三郎の返答は小声であつたによつて、時宜に適してをる。(15・4)

c現はれて、(15・5)△現はれて(5・2)↓現れて、(15・9)  
c羽振りよく(15・5)△羽振りよく(5・2)↓羽振くよく(15・9)

cお互に顔を見合くして苦笑した。(15・6)△(5・2)↓お互に顔を見合はして苦笑した。(15・10ゝ11)

c真書きで(15・7)△真書きで(5・2)↓真書きで(15・12)  
○異国船を見学する(14・10)△(5・2)↓異国船を見物する(15・13)

g二人は書物を包みく見台をそれぞれ部屋の隅に(15・11ゝ12)▲二人は書

物を包み見台をそれ／＼に部屋の隅に（5・3）↓二人は書物を包み、見台をそれぞれ部屋の隅に（15・14）（15）

○その間に先生は、次の間で一張羅の（15・12）△（5・3）↓先生は隣室から一張羅の（15・15）

○異国船を目近く見学しに（15・13）△（5・3）↓異国船を目近く見物しに（16・1）

○崖の鼻から（15・14）△（5・4）↓崖の上から（16・2）

○国家一大事の秋<ぢや』（15・16）△（5・4）↓国家一大事の秋だ。刀を身につけ、堂々として敵を見るのぢや」（16・5）（6）

hと云ひきかせた。／「一行空き」／羽織袴に脇差をさして四角張った鶴賓先生は、（15・17）（16・1）▲と云ひきかせた。／「第5回が終わり、

第6回が始まる」間吟塾（六）／羽織袴に脇差をさして四角張った鶴賓先生は、（5・4）（6・1）↓と云ひきかせた。／<羽織袴に脇差をさ

して四角張った鶴賓先生は、（16・7）（8）

○見るのぢやよ』（16・5）△（6・1）↓見るのぢや」（16・12）

○大人げないことであつたと気がついたのである。（16・6）（7）△（6・

1）↓大人げないことである」と気がついたのであつた。（16・13）（14）

○仮名之助と庄三郎とは（16・9）△（6・1）↓仮名之助と庄三郎とは（17・1）

e二人は庭の長石づたひに駆け出したが（16・9）（10）△（6・1）↓二人は庭の長石づたひに駆け出したが（17・1）（2）

e庭木戸のところまで駆け出して行くと（16・10）（11）△（6・1）↓庭木戸のところまで駆け出して行くと（17・3）

d頭を下げた。（16・12）△（6・1）↓頭をさげた。（17・4）

×句配（16・13）▲句配（6・1）↓句配（17・5）

○生えてゐた。（16・14）△（6・2）↓生えてゐる。（17・6）

○<荒れはてた庭（16・14）△荒れはてた庭（6・2）↓また荒れはてた庭（17・6）（7）

○e一筋の小径が通じてゐて、その小径の（16・15）▲一筋すぢの小径が通じてゐてその小径の（6・2）↓一条の小径が通じく、その小径の（17・7）（8）

gその小径の突きあたりにくもう一つの（16・15）（16）△（6・2）↓その小径の突きあたりに、もう一つの（17・7）（8）

e小径を駆けぬけた。（17・4）△（6・2）↓小径を駆けぬけた。（17・12）

○d左<の端の障子戸を明けた。（17・5）△左の端の戸の障子を明けた。（6・2）↓左手の戸口の障子戸をあけた。（17・13）

○d右の端の戸口の障子戸を明けた。（17・5）（6）△（6・2）↓右の端の障子戸をあけた（17・13）（14）

d障子戸を明けひろげてゐた。（17・7）△（6・2）↓障子戸をあけひろげてゐた。（17・15）

gこの上り框には、右隣の家の（17・10）（11）△（6・3）↓この上り框には、右隣の家の（18・4）

dといふやうな声もきこえて来た。（17・11）（12）△（6・3）↓といふやうな声もきこえてきた。（18・5）

d箏箏を明けたてする音（17・12）△（6・3）↓箏箏をあけたてする音（18・5）

○騒がしい日（17・17）△騒がしい日（6・4）↓騒々しい日（18・10）

d 会へぬかもしれん』 (18・1) △ (6・4) ↓ 会へぬかもしれん』 (18・11)

○ 目をつむつてゐた。 (18・6) △ (7・1) ↓ 目をつむつた。 (19・3)

a 何とやら云ふたのう？ (18・7・8) ▲ 何とやら云つてをつたな？ (7・1)

1) ↓ 何とやら云うたのう？ (19・4・5)

c 子供の声が聞こえた。 (18・14) △ 子供の声が聞えた。 (7・1) ↓ 子供の声が聞こえた。 (19・12)

○ c 割合ひ<長い脇差 (19・1) △ 割合ひ長い脇差 (7・2) ↓ 割合<に長い脇差 (19・15・20・1)

e 頤髭 (19・5) △ (7・2) ↓ 頤鬚 (20・5)

× とりかゝつた、 (19・5) △ とりかゝつた、 (7・2) ↓ とりかかつた、 (20・5) 「誤植の継承。〃とりかか〔ゝ〕つた。〃とあるべきところ」

○ 合点<行かなかつた。 (19・6) △ (7・2) ↓ 合点が行かなかつた。 (20・6)

○ 『太吉、貴様は偉いことを申したのう。貴様<、江戸湯島の (19・9) △ (7・2) ↓ 「太吉、<偉いことを申したのう。貴様は、江戸湯島の (20・9)

○ 今朝ほどから、<餅搗きのことばかり (19・12) △ (7・3) ↓ 今朝ほどから、それで餅搗きのことばかり (20・12)

g しかるに先生の下僕。すなはち貴様は、 (20・5) ▲ しかるに一先生の下僕、すなはち貴様は、 (7・4) ↓ しかるに先生の下僕。すなはち貴様は、 (21・7)

○ 拗ねてみるだけであつた。 (20・9) ▲ 拗ねてみてゐるだけであつた。

(8・1) ↓ 拗ねてゐるわけであつた。 (21・11)

e 覺藏の頤髭 (21・3) △ (8・1) ↓ 覺藏の頤鬚 (22・8)

○ g 太吉は土間を出て、そこに立てかけてあつた鉄箱 (21・10) △ (8・2)

2) ↓ 太吉は土間を出て<そこに立てかけておいた鉄箱 (23・2)

○ 水で濡らしてゐた。 (21・12) △ (8・2) ↓ 水で濡らした。 (23・4)

○ ことを話し合つてゐた。 (22・4) △ (8・3) ↓ ことを話し合つた。 (23・13)

○ 何を入れてあるのぢやな？』 (22・5) △ (8・3) ↓ 何を入れてあるのぢや<？』 (23・10)

g 何とか大集成、全冊 (22・7) △ (8・3) ↓ 何とか大集成<全冊 (24・1)

○ 不逞な恰好<風体 (22・12) △ (9・1) ↓ 不逞な恰好の風体 (24・6)

× 『のう太吉。早や日が暮れた、ゆつくり行かう。 (23・1) ▲ 「太吉。いづれにしても、早や日が暮れた。ゆつくり行かう。 (9・1) ↓ 「のう太吉。早や日が暮れた、ゆつくり行かう。 (24・11) 「『満日』のように〃早や日が暮れた。〃とあるべきところか」

○ ひと先づ<息を入れた。 (23・2) △ (9・1) ↓ <先づ一つ息を入れた。 (24・12)

○ 一ばん重う御座いますな。 (23・3) ▲ 一ばん重う御座いましたな。 (9・1) ↓ 一ばん重う御座います<。 (24・13)

○ 驟雨 (23・3) ▲ 俄雨 (9・1) ↓ 俄雨 (24・13)

○ 『先生は、中庸を得たことを申される』 (23・11) △ (9・2) ↓ 「先生

は、うがつたことを申される」(25・7)

○ a として波打ちぎわに沿ひ、(23・13) ▲そして波打ちぎわに沿ひ、(9・2) ↓その波打ちぎわに沿ひ、(25・9)

○ 或ひは縁家から帰つて行くお武家(24・1) △(9・2) ↓或ひは縁家を訪ねて帰路についてゐるお武家(25・14・15)

◎ g 陣羽織を着て馬に乗った役人が、忙しく馬を駆けさして来た。(24・3・4) ▲陣羽織を着て馬に乗った役人が、馬を駆けさして行つた。(9・2) ↓馬に乗った陣羽織の役人が、忙しく馬を駆けさして来た。(26・1・2)

○ 同じやうな恰好をして馬に乗った役人が、後ろの方から駆けつけて来た。(24・4) △(9・2) ↓同じやうな風俗をして馬に乗った役人が、後ろの方から駆けつけて来た。(26・2・3)

g 乗馬の役人はさう呼ばはつて(24・6) ▲その乗馬の役人は、さう呼ばはつて(9・2・3) ↓乗馬の役人は、さう呼ばはつて(26・5)

○ 港内の各お台場では、すでに日の暮れ方から盛んに篝火を(24・7) △(9・3) ↓港内の各お台場では、盛んに篝火を(26・6)

d 覚蔵等は(26・8) △(9・3) ↓覚蔵らは(26・7)

【第二齣】26頁～49頁 合計24頁

○ オロシヤ船(半扉 章見出し 吉田貫三郎画)(25頁) ↓第二齣(26・9)

g 打ち見たところこの船体の長さ(25・1・2) ▲打ち見たところ船体の長さ(10・1) ↓打ち見たところこの船体の長さ(26・11・12)

○ 大小十五挺の石火矢(26・3) △(10・1) ↓大小十五挺の大筒(26・

12)

○ また艦上にも六挺据ゑ、その上段(26・3) ▲また艦の上にも六挺据ゑつけ一その上段(10・1) ↓また艦の上にも六挺据ゑ、その上段(26・12)

○ 二挺の小さな石火矢を(26・3・4) △(10・1) ↓二挺の小型の筒を(27・1)

○ 石火矢の火蓋を切らうとしてゐるやうな様子である。(26・5) △(10・1) ↓大筒の火蓋を切らうとしてゐるやうな物々しさである。(27・2・3)

g 夜目にもくはつきりとその気配が(26・5・6) △(10・1) ↓夜目にもくはつきりとその気配が(27・3)

○ g しかし検使の一行は、異国船に乗り移るとき、愚図々々して(26・10) △(10・1) ↓ところが、検使の一行は、異国船に乗り移るとき愚図々々して(27・7)

○ 阿蘭陀大通事<名村八左衛門(26・12) △(10・1) ↓阿蘭陀大通事の名村八左衛門(27・9)

○ g 彼は袴の股立ちをとり、船腹の梯子を伝つて甲板にたどりつき、袴の股立ちをおろして静かに(26・13・14) ▲彼は袴の股立ちをとり船腹の梯子を伝つて甲板にたどりつくと、袴の股立ちをおろして静かに(10・2) ↓彼は袴の股立ちをとり、船腹の梯子を伝つて甲板にたどりつくと袴の股立ちをおろし、静かに(27・10・11)

g 遠来の客に対し、威儀を正して(27・1) △(10・2) ↓遠来の客に対し<威儀を正して(27・12・13)

d g 去りながらこの船は、何国の船にて、また如何なる事情によつて渡来な

されたか、(27・3・4) △(10・2) ↓さりながら、この船は何国

の船にて、また如何なる事情によつて渡来なされたか。(27・14・15)

g その詳細をうけたまはりたく役目をもつて(27・4) ▲その詳細をうけ

たまはりたく一役目をもつて(10・2) ↓その詳細をうけたまはりた

く、役目をもつて(27・4)

g すると異国人の堵列の最右翼に立つてゐた肥大漢が、大股に進み出て、

(27・6) ▲すると、異国人の堵列の最右翼に立つてゐた肥大漢が大股

に進み出て(10・2) ↓すると、異国人の堵列の最右翼に立つてゐた肥

大漢が大股に進み出て、(28・3)

○にこにこと愛嬌笑ひをして、八左衛門の(27・8) ▲にこにこと愛嬌笑ひ

をして八左衛門の(10・2) ↓にこにこと愛嬌笑ひを見せ八左衛門の

(28・5・6)

g そして有無を云はせず、名村大通事の(27・9) △(10・2) ↓そして有

無を云はせず名村大通事の(28・6)

○肥大漢はにこにこと笑つてゐる(27・13) △(10・3) ↓肥大漢はにこに

こと笑つてゐる(28・10)

○<大通事は握られてゐる(27・15) △(10・3) ↓名村大通事は握られて

ゐる(28・12)

○大小十数挺の石火矢(27・17) △(10・4) ↓大小十数挺の大筒(28・

14)

○手真似である。(27・17・28・1) △(10・4) ↓真似のつもりであ

る。(28・15)

○a g 顔をぢつと見つめく再び異様な駄舌の声(28・9) ▲顔をぢつと見つ

め、再び異様な駄舌の声(11・1) ↓顔をじつと見つめ、再び異様な駄

舌の声(29・8)

○<怖るべきオロシヤ船(28・11・12) △(11・1) ↓最早や怖るべきオロ

シヤ船(29・11)

○背の高い異国人(29・2) △(11・1) ↓背の高い異人(30・3)

○しかも相手の異国人は、(29・6) △(11・2) ↓しかも相手の異人

は、(30・7)

○相当に格式のある役人らしい面がまへである。(29・6・7) △(11・

2) ↓相当に格式のあるお役人らしい面がまへである。(30・7・8)

○さつそく検使の立会ひを求める(29・9) △(11・2) ↓直ぐに検使の立

会ひを求める(30・10)

c 確くにオロシヤ船と見受けま<sup>たしか</sup>す。(29・15) △確くにオロシヤ船と見受けま

す。(11・2) ↓確かにオロシヤ船と見受けま<sup>たしか</sup>す。(31・1)

g 武卒らに向かひく駄舌を一声(30・1) △武卒らに向かひ駄舌を一声(11

・2) ↓武卒らに向かひく駄舌を一声(31・4)

c 武卒らの列に向くひ、またもや(30・3) △武卒らの列に向ひ、またもや

(11・2) ↓武卒らの列に向くひ、またもや(31・7)

c g 梯子口から、甲板に検使たちが姿を現<sup>あらは</sup>した。(30・5) ▲梯子口から

一甲板に検使たちが姿を現<sup>あらは</sup>した。(11・3) ↓梯子口から甲板に検使

たちが姿を現<sup>あらは</sup>した。

f 阿蘭陀屋敷の加比丹へんくキツキ・ゾーフ(30・7) △(11・4) ↓阿蘭

陀屋敷の加比丹へんくキツキ・ゾーフ(31・11)

f 阿蘭陀役人セークレータリリーズ(30・7・8) △(11・4) ↓阿蘭陀役

人セークレータリリーズ(31・11・12)

g 検使たち袴を着た人たちは甲板に(30・8) ▲検使たち袴を着た人たち

は、甲板に(11・4) ↓ 検使たち袴を着た人たちは、甲板に(31・12)

○ g 先刻<つい半>ときほど前に(30・10) △ 先刻一つい半ときほど前に(12・1) ↓ 先刻も、つい一ときほど前に(31・14)

○ 三人の役人が来船して、(30・10) △ (12・1) ↓ 三人の役人がこの船に来て、(31・14) △ (32・1)

○ 検使が出張する筈だと云ひ残し、三人の役人は急いで引き取つて行つたのである。(30・11) △ (12・1) ↓ 検使が出張すると、阿蘭陀語で云つて、引き取つて行つたのである。(32・2)

○ 異<人>にお辞儀をした。(30・13) △ (12・1) ↓ 異<人>にお辞儀をした。(32・3)

○ 長めの巻き毛になつた頭髪で(30・14) △ (12・1) ↓ 巻き毛になつた長めの頭髪で(32・4) △ (5)

g 後刻<御検使の方々が>お出迎へに(31・3) △ (12・1) ↓ 後刻、御検使の方々が>お出迎へに(32・9)

○ お見知り置きを願ひたい』(31・5) △ (12・1) ↓ お見知り置きを願ひたい』(32・11)

○ g 磊落に<必要以外なことまで>(31・6) ▲ 寧ろ磊落に必要以外なことまで(12・1) ↓ 磊落で、必要以外なことまで(32・12)

○ g この船は、何国の船にて<何用あつての>御寄港であつたか(31・12) △ (12・2) ↓ この船は<何国の船にて>、何用あつて<御寄港なされたか>(33・3) △ (4)

○ オロシヤ人接待の準備を致されて(32・2) △ (12・2) ↓ オロシヤ人接待の準備までされて(33・11)

○ g また<港外の漁船に>乗り組む者の所言(32・3) △ (12・2) ↓ また、

この長崎港外に漁漁する漁船の者の所言(33・11) △ (12)

○ それは迷惑な、思ひもよらない履きちがへである。(32・5) △ (12・3) ↓ それは最近に、一般人民たちの云ひふらしてゐた流言であつた。

いまその流言が、むくむくと変化して現れたも同然である。(33・14) △ (15)

○ 検使たちが殆ど呆然としてゐると、(32・5) △ 検使たちが殆ど呆然としてゐると、(12・3) ↓ 検使たちが黙然としてゐると、(33・15)

g コルテゲノは服の脇の縫目から、白い布片を(32・5) △ (12・3) ↓ コルテゲノは服の脇の縫目から、白い布片を(33・15) △ (34・1)

○ 多謝を申す。(32・8) ▲ 多謝を申す一(12・3) ↓ 感謝つかまつる。(34・2) 「『満日』は行末の句点を略す」

○ 指さして、(32・12) △ 指さして、(12・4) ↓ 指して、(34・6)

× h と云つて、その戸口に三人の通事を案内した。／「一行空き」／程なく、甲板の通用口のやうなところから、(32・14) △ (15) ▲ と云つて、その戸口に三人の通事を案内した。／「第12回が終わり、第13回が始まる」

○ オロシヤ船(四)／程なく、甲板の通用口のやうなところから、(12・4) △ (13・1) ↓ と云つて、その戸口に三人の通事を案内した。／

程なく、甲板の通用口のやうなところから、(34・6) △ (7) × 彼くひどく様子を改めて、(32・16) ▲ そしてひどく様子を改めて、(13・1) ↓ 彼はひどく様子を改めて、(34・10)

c 顔を見合へた。(33・4) △ 顔を見合へた。(13・1) ↓ 顔を見合へた。(34・14)

○ この両名もひどく改まつてゐた。／『では、御同役』／『しからば』／両

名は申し合せたやうに袴の襠に手を入れて、(33・4) △ (7) ▲ この両名

も、ひどく改まつてゐた。／「では、御同役」／「しからば」／両名は申し合せたやうに、袴の襠に手を入れた。そして、(13・1) ↓この両名もひどく改まつてゐた。／＜両名も袴の襠に手を入れて、(34・14・15)

g 矢張り足袋跣足の摺り足で、本木小通事の後ろから (33・7) ▲矢張り一足袋跣足の摺り足で、本木小通事の後ろから (13・1) ↓矢張り足袋跣足の摺り足で＜本木小通事の後ろから (34・15)

f 阿蘭陀船頭、(33・9) △ (13・1) ↓阿蘭陀船長 (35・2)

f 阿蘭陀セキレ＜タリーズ (33・9) ▲阿蘭陀筆者 (13・1) ↓阿蘭陀船セキレ＜タリーズ (35・2)

○ d 検使達が戸を明けたてして傍を通つても、目の玉一つ (33・13) △ (13・1) ↓検使達が戸をあけたてして傍を通つても武卒は目の玉ひとつ (35・6・7)

g 十二畳敷きで花毛氈が敷いて (33・14) △十二畳敷きで一花毛氈が敷いて (13・2) ↓十二畳敷きで、花毛氈が敷いて (35・8)

c オロシヤ使節に向ひ、(34・7) △オロシヤ使節に向ひ、(13・2) ↓オロシヤ使節に向ひ、(36・4)

c オロシヤ使節に申し出た。(34・12・13) △オロシヤ使節に申し出た。(13・3) ↓オロシヤ使節に申し出た。(36・10・11)

c g 御身もまたわが国風に沿うて振舞はれるや否や＜御所存を承<sup>は</sup>りたい』(34・15・16) ▲御身もまたわが国風に沿うて振舞はれるや御所存を承<sup>は</sup>りたい』(13・3・4) ↓御身もまたわが国風に沿うて振舞はれるや否や、御所存を承<sup>は</sup>りたい』(36・13・14)

d 去りながら (35・6) △ (14・1) ↓さりながら (37・6)

○ 次第に困惑の表情が (35・11) △ (14・1) ↓尚ほさら困惑の表情が (37・11)

× 居住まひくなほした。(35・12) ▲居住まひをなほした。(14・1) ↓居住まひをなほした。(37・12)

f 侯爵レザノフド (35・12) △ (14・1) ↓侯爵レザノツト (37・12)

e 不仕付 (35・13) △ (14・1) ↓不賤 (37・13)

○ あのと仁はオロシヤの御勅使で御座らう?』(36・2) △ (14・2) ↓あのと仁はオロシヤの御勅使である』(38・4)

○ 『左様、(36・3) △ (14・2) ↓「いかにも、(38・5)

○ 例の御信牌をも所持いたすことであらう』(36・3・4) △ (14・2) ↓例の御信牌を＜所持いたしてをることであらう』(38・5・6)

○ 幕府は一も二もなく拝み倒しの一手で相手を (36・8) △ (14・2) ↓幕府は＜拝み倒しの一手で相手を (38・10)

○ 談話をとりかはしてゐた。(36・13) △ (14・2) ↓談話をとりかはした。(38・15)

c 承<sup>ま</sup>はりたい (36・15) △ (14・2・3) ↓承<sup>く</sup>はりたい (39・2)

○ g 外出するためには、事実、相当額の金＜を奉行所の役人に (37・6) ▲外出するためには、事実、相当額の金＜を奉行所の役人に (15・1) ↓外出するためには、事実、相当額の金＜を奉行所の役人に (39・10) 「『満日』の「当額の金を奉行相所」の箇所は誤植」

g これは＜しかし加比丹の愚痴である。(37・8) △ (15・1) ↓これは、しかし加比丹の愚痴である。(39・12)

g 『されば＜明日もまた、貴下に四百ターレルの (37・10) △ (15・1) ↓「されば、明日もまた＜貴下に四百ターレルの (39・14)



g 大散財をかけることは予の欣快と (37・10) △大散財をかけることは一  
予の欣快と (15・1) ↓大散財をかけることは、予の欣快と (39・14)  
○日本の検使たちの方を見て云った。 (37・13) △ (15・1) ↓日本の検使  
たちの方に向きなほつて云った。 (40・3)

○b 検使たちは、今更らオロシヤの颯爽たる威力を見せつけられ、たゞ感慨  
無量の思ひであつた。しかも阿蘭陀加比丹は、二の句もつけなくて (38  
・6・7) ▲検使たちは、今更<sup>さ</sup>オロシヤの颯爽たる威力を見せつけら  
れ、ただ感慨無量の思ひであつた。しかも一阿蘭陀加比丹は、二の句も  
つけなくて (15・2) ↓阿蘭陀加比丹は、二の句もつけなくて (40・  
13)

g 奉行所の御検使は、江戸幕府御発行の信牌御覧の儀を、 (38・9・10)  
▲奉行所の御検使は、江戸幕府御発行の信牌御覧の儀を、 (15・2) ↓  
奉行所の御検使は、江戸幕府御発行の信牌御覧の儀を、 (40・15・41・  
1)

○阿蘭陀加比丹の退席さるゝお供を承はり、 (38・11・12) △ (15・2) ↓  
阿蘭陀加比丹のくお供を承はり、 (41・3)

×御遠慮いたすべきかと考へる』 (38・12) △ (15・2) ↓御遠慮いたすべ  
きかと考へる。』 (41・3・4) 「『有光』は考へる」 とあるべきと  
ころ」

○h 阿蘭陀加比丹の後を追つて甲板に出て行くと、くこのオロシヤ船の周囲  
には、 (38・15・16) △ (15・2) ↓阿蘭陀加比丹の後を追つて甲板に  
出て行つた。』このオロシヤ船の周囲には、 (41・8・9)

○海面は灯籠流しの際のやうな (38・17) △ (15・3) ↓海面は灯籠流し  
の際のやうな (41・10)

○髭面の男の背中を (39・9・10) △ (15・4) ↓髭面く男の背中を (42・  
4)

○c 謂はゆる狒々の笑顔といふあの厭やらしい笑ひ顔 (39・12) △ (16・  
1) ↓狒々の笑顔のやうな厭くらしい笑ひ顔 (42・6)

c 『厭やらしい顔 (39・15) △ (16・1) ↓「厭らしい顔 (42・9)

b 指ざした。 (40・1) △指ざした。 (16・1) ↓指ざした。 (42・12)

g いったいあの娘はく紅毛人に好かれるたちぢや。 (40・2・3) △ (16・

1) ↓いったいあの娘は、紅毛人に好かれるたちぢや。 (42・13・14)

e g かつて阿蘭陀屋敷の年若い受附役が、あの娘を見たいばかりに、

(40・3) △ (16・1) ↓かつて、阿蘭陀屋敷の年若い受附役がくあの

娘を見たいばかりに、 (42・14・43・1)

○外出費二タールルの苦面くつかなくて、 (40・4・5) △ (16・1) ↓外

出費二タールルの苦面もつかなくて、 (43・1・2) 「あるいは誤植訂

正と見るべきか」

c 問ひ合くせに参る。 (40・8) ▲問ひ合せに来る。 (16・1) ↓問ひ合は

せに参る。 (43・5)

c 覚蔵の住まひの両隣りは、 (40・12) △覚蔵の住まひの両隣りは、 (16・

2) ↓覚蔵の住まひの両隣くは、 (43・10)

c 右隣りに住む医者 (40・14) △右隣りに住む医者 (16・2) ↓右隣くに住

む医者 (43・12) △ (16・1)

c 左隣りに住む医者 (40・14・15) △左隣りに住む医者 (16・2) ↓左隣く

に住む医者 (43・13)

g 病患の切開にあたつてく病人の (41・1) △ (16・2) ↓病患の切開にあ  
たつて、病人の (44・1)

×それは迂遠な法であるといふ。その医者の新法によれば、(41・3) ▲そ

れは迂遠な法であるといふことで、その医者の新法によれば(16・2)

↓それは迂遠な法であるといふ。その医者の新法によれば、(44・3)

4) 「『今日』は誤植か」

a e g といふものを用ゐる。或ひは絹の糸を用ゐる。(41・4) △(16・

2) ↓といふものを用ゐる。或は絹の糸を用ゐる。(44・4)

○e糸を用ゐること(41・6) △(16・3) ↓糸を用ゐること(44・7)

◎概して医術といふものは、今日迂遠きはまるものださうな。(41・6)

7) △(16・3) ↓概して今日の医術といふものは、迂遠きはまるもの  
ださうな。(44・7) 8)

○そのとき、突然、弥十郎の肩に(41・9) △(16・3) ↓そのとき、<弥

十郎の肩に(44・10)

h 『これで、あしこを見よ』/といふやうに、陸地の(41・11) △(16

・4) ↓「これで、あしこを見よ」<といふやうに、陸地の(44・12)

b 指ざした。(41・12) △指ざした。(16・4) ↓指ざした。(44・12)

○お台場を見ることは遠慮いたしたい。(41・14) △(17・1) ↓お台場を

望見することは遠慮いたしたい。(45・1) 「『満日』の“こと”は合

字」

○g 汝は<左様なものを見るので<ない。汝は<彼方の民家を見るのである。

彼方に<一人の娘が見ゆる。(42・2) △(17・1) ↓汝は、左様

なものを見るのではない。汝は、彼方の民家を見るのである。彼方に、

一人の美しい娘が見ゆる。(45・5) 6)

○g 彼女の名は<何であるか? また彼女の家の名は何であるか? (42・

3) ▲彼女の名は何であるか?、また彼女の家の名は何であるか?」

(17・1) ↓彼女の名は、何であるか? <彼女の家の名は何である  
か? (45・6)

○文錦堂の看板女(42・12) △(17・2) ↓文錦堂の看板娘(45・15)

○c 櫛巻きに髪を結つてゐた。(42・12) △櫛巻きに髪を結つてゐた。(17

・2) ↓櫛巻<に<結つてゐた。(46・1)

c 櫛巻きの髪に(43・3) △櫛巻きの髪に(17・2) ↓櫛巻<の髪に(46・

9)

◎その町奴風の若い男に、娘はお辞儀を(43・5) △(17・2) ↓娘はその

町奴風の若い男にお辞儀を(46・11)

○弥十郎はこの一部始終を(43・6) △(17・2) ↓弥十郎はその一部始終

を(46・12)

○さればこの船の乗組<は、(43・7) ▲さればこの船の乗組<は、(17・

2) ↓さればこの船の乗組<の人たちは、(46・13) 「あるいは『今日』

『満日』は誤植とみるべきか」

○吾れらは<、カナリア島にても上陸した。(43・10) △(17・3) ↓吾れ

らはこの港に来る途中、カナリア島に<上陸した。(47・2)

○<サウテ・アメリカ国にても上陸した。(43・10) ▲サウテ。アメリカ国

にても上陸した。(17・3) ↓また、サウテ・アメリカ国にても上陸し

た。(47・2) 3)

○その他、各所に上陸し、鬱を散じた。(43・11) △(17・3) ↓その他、

各所に上陸して鬱を散じた。(47・3)

g マルケイサ島にては、各自に(43・11) △(17・3) ↓マルケイサ島にて

は<各自に(47・3) 4)

e 遠目鏡(43・14) △(17・4) ↓遠眼鏡(47・6)

b 二の句がつけなかった。(43・14) ▲二の句もつけなかった。(17・4)  
↓二の句がつけなかった。(47・6)

h 不埒なことを云ふものである。/ 弥十郎は呆れ果て、(44・2・3) △  
(18・1) ↓不埒なことを云ふものである。< 弥十郎は呆れ果て、(47・10)

g なるほどこの髭面は、他の武卒らと違ひ< 腰に胴乱のやうな(44・11) △  
(18・1) ↓なるほどこの髭面は< 他の武卒らと違ひ、腰に胴乱のやうな(48・4)

g 数人のオロシヤ人が突つ立つて、物珍しさうに(44・16・17) △(18・2) ↓数人のオロシヤ人が突つ立つて< 物珍しさうに(48・9・10)

× g このオロシヤ< たちは、阿蘭陀語が(44・17) △(18・2) ↓このオロシヤ人< たちは、阿蘭陀語が(48・10) 「オロシヤ」という国名で「オロシヤ人」を指すことは可能だが、他の箇所では全て「オロシヤ人」と表記しているので、ここは誤植と見られる」

○いま吾れらに僚船< について質問を(45・2) ▲いま吾れらに不用な質問を(18・2) ↓いま吾れらに僚船< の有無について質問を(48・12)

○< イブンの髭面は、いきなり< 艦の方に(45・7) ▲イブンの髭面は、いきなり< 薇仕掛のやうに向きを変へた。そして艦の方に(18・2) ↓するとイブンは、< 艦の方に(49・2)

e 向かつて駆け出して行き、(45・7) △(18・2) 向かつて駆け出して行き、↓向かつて駆け出して行き、(49・2)

e みんな艦の方に駆け出した。(45・8) △(18・2) ↓みんな艦の方に駆け出した。(49・3)

×武卒らに< 鎧鉄砲をとつて整列し、(45・8・9) ▲武卒らは鎧鉄砲をとつて整列し、(18・2・3) ↓武卒らは鎧鉄砲をとつて整列し、(49・3)

て整列し、(18・2・3) ↓武卒らは鎧鉄砲をとつて整列し、(49・3・4) 「『今日』は」は「は」を字形の似通った「に」と誤ったか」

b イブンはあまり急いたので、(45・10) △イブンはあまり急いたので、(18・3) ↓イブンはあまり急いたので、(49・5) 「『今日』は」急いた「とも解しうるが、あるいは「急いだ」の誤植とすべきか」

○問題の草浦覚蔵だ』(45・12) △(18・4) ↓たしかに草浦覚蔵だ』(49・7)

【第三齣】49頁～68頁 合計20頁

○文錦堂さん「半扉 吉田貫三郎画」(47頁) ↓第三齣(49・9)

g 草書長屋の草浦覚蔵は、自称、憂国の志士である。(48・1) ▲草書長屋の草浦覚蔵は、自称、憂国の志士である。(49・10)

g 浪々生活で、貧乏暮らしは(48・1・2) △(19・1) ↓浪々生活で、貧乏暮らしは(49・10・11)

c こゝ暫らくは(48・9・10) △こゝ暫らくは(19・1) ↓こゝ暫らくは(50・9・10)

g 至急、オロシヤ船の海に浮かぶ絵(48・10) △(19・1) ↓至急、オロシヤ船の海に浮かぶ絵(50・9)

g 覚蔵は、もう一度その書状を(49・2) △(19・2) ↓覚蔵は、もう一度その書状を(50・15)

d g さう云つて、入口の格子戸を明ける音がした。(49・5) △(19・2) ↓さう云つて、入口の格子戸を明ける音がした。(51・3)

d g 番頭は、上にあがつて来て、仕切りの唐紙を明けた。(49・10) △(19・1)

・2) ↓番頭はく上にあがつて来て、仕切りの唐紙をあけた。(51・8)

c e 殆ど駆け出すやうに(50・4) △殆ど駆け出すやうに(19・4) ↓殆んど駆け出すやうに(52・5)

e 無闇に(50・6) △無闇に(20・1) ↓無闇に(52・6)

○戻つて来たさうス。(50・7) △(20・1) ↓戻つて参つたさうス。(52・7)

× g 名村様をはじめ、末席弥十郎もおいでになつた(50・7) ▲名村様をはじめ、末席弥十郎様もおいでになつた(20・1) ↓名村様をはじめく末席弥十郎様もおいでになつた(52・7) (8) 「『今日』は“様”を誤脱」

○手首を挫かれたさうで御座いますな』(50・9) △(20・1) ↓手首を挫かれたさうスな』(52・9) (10)

×歩くことにかけても大並み以上はしつこい。(50・11) (12) ▲歩くことにかけても人並み以上はしつこい。(20・1) ↓歩くことにかけても大並み以上はしつこい。(52・11) (12) 「誤植継承。“人並み”とあるべきところ」

g お見舞ひとして、金一封を(50・14) △(20・1) ↓お見舞ひとしてく金一封を(52・14)

○五両とはずあぶん奮発したものである。(51・3) △(20・1) ↓くずあぶん奮発したものである。(53・6)

○『それは、ま性急な』(51・10) ▲「それはま、性急な」(20・2) ↓「それはく性急な」(51・11)

○『いや、それで三日間で(51・11) △(20・2) ↓くそれで三日間で

(53・14)

○『左様、私は三箇月ぐらゐとの見当ス。(51・15) △(20・2) ↓「左様、く三箇月ぐらゐとの見当ス。(54・3)

g まかりまちがへば、半年も一年も(51・17) △(20・2) ↓まかりまちがへばく半年も一年も(54・5)

○三日か四日で引きあげては、(52・5) ▲三日か四日で引きあげられて、(20・3) ↓三日か四日で引きあげられてく、(54・10)

○覚蔵は潔く、／『承知、承知』／と合点した。(52・8) △(20・4) ↓覚蔵は潔くく合点した。(54・13)

g それで、オロシヤ船の絵だけは、(53・4) △(21・1) ↓それでくオロシヤ船の絵だけは、(55・10)

g 『内々で、誰に売捌くのだな？(53・6) △(21・1) ↓「内々でく誰に売捌くのだな？(55・12)

○仲間を殖やす種にするさうス。(53・8) ▲仲間を殖やす種にするさうスな。(21・2) ↓仲間を殖やす種にするさうスな。(55・15) (56・1)

g 尤も、国論者流にも二様の氣質(53・8) (9) ▲尤も、国論者流にも二種

類の氣質(21・2) ↓尤もく国論者流にも二様の氣質(56・1)

○大きな大筒を(53・10) ▲大きな大きな大筒を(21・2) ↓大きな大筒を(56・2) 「『満日』の“大きな”は衍字か。『有光』の“大きな筒”

は“大きな大筒”とあるべきか」

○ g 文錦堂の番頭は、懐くから金一封を(53・12) △(21・2) ↓文錦堂の番頭はく懐中から金一封を(56・4)

g 熨斗をつけ、『御見舞』と書きく更らに(53・14) (15) ▲熨斗をつけ、

「御見舞」と書き更に(21・2) ↓熨斗をつけ「御見舞」と書き、更らに(56・7～8)

e『確かに貯った。(53・16) △「確かに貯った。(21・2) ↓「確かに預った。(56・9)

g文錦堂の番頭は「くだいこと念を押した。(54・1) △(21・2) ↓文錦堂の番頭は「くだいこと念を押した。(56・11)

g弥十郎の宅には「書斎の窓にまだ明りが(54・2) △(21・2) ↓弥十郎の宅には「書斎の窓にまだ明りが(56・13)

g弥十郎の声が「入口の戸(54・2) △(21・2) ↓弥十郎の音が「入口の戸(56・13～14)

gh声の調子では「あまり不機嫌でもなさうである。△「覚蔵は戸の外から(54・3～4) △(21・2) ↓声の調子では「あまり不機嫌でもなさうである。△「覚蔵は戸の外から(56・14)

×覚蔵は咳払いをして、(54・6) △(21・3) ↓覚蔵は「咳払いをして、(57・2)

g戸の内側から「女の声で答へがあつた。(54・8) △(21・3) ↓戸の内側から「女の声で答へがあつた。(57・4)

dいま戸を明ける』(54・14) △(21・4) ↓いま戸をあける」(57・11)

dお袋御が明けてくれた。(54・15) △(21・4) ↓お袋御があけてくれた。(57・12)

○「先生は御機嫌いかがで御座いますか?」(55・10) 「『満日』第22回未見」 ↓「老先生、御機嫌いかがで御座いますか?」(58・8)

○オロシヤ人の遠眼鏡はよく見えるものだな』(55・13) 「『満日』第22回未見」 ↓「オロシヤ人の遠眼鏡はよく見えるな」(58・11)

g弥十郎のお袋御に会釈して、金一封を(56・3) 「『満日』第22回未見」 ↓弥十郎のお袋御に会釈して「金一封を(59・3)

g書見台の上には「部厚な蘭書が(56・5) 「『満日』第22回未見」 ↓書見台の上には「部厚な蘭書が(59・5)

d『御書見中、お邪魔して(56・7) 「『満日』第22回未見」 ↓「御書見中、御邪魔して(59・7)

○弥十郎は微笑をもらしてゐた。(56・15) 「『満日』第22回未見」 ↓弥十郎は微笑を見せてゐた。(59・15)

◎dその時窓の外で、／「岩瀬氏、御在宅か? 阿蘭陀通事、岩瀬弥十郎氏は御在宅か?」／無遠慮な銅鑼声で云ふものがあつた。(57・3～5)

△(23・1) ↓そのとき窓の外で、無遠慮な銅鑼声で云ふものがあつた。／「岩瀬氏、御在宅か? 阿蘭陀通事、岩瀬弥十郎氏は御在宅か?」(60・6～7)

c顔を見合へせた。(57・6) △(23・1) ↓顔を見合へせた。(60・8)

d窓を明けてもらひたい』(57・7) △(23・1) ↓窓をあけてもらひたい」(60・9)

d戸を明けた。(57・9) △(23・1) ↓戸をあけた。(60・11)

gそれは弥十郎と顔見知りの「中込卯之助といふ者である。(57・13) △(23・1) ↓それは弥十郎と顔見知りの「中込卯之助といふ者である。(61・1)

○物々しく毛を生やし、(57・14) △(23・1) ↓物々しい鬚を生やし、(61・2～3)

×衣類を来て(57・15) ▲衣類を着て(23・1) ↓衣類を着て(61・3)

◎c顔役は大きく腕組みをして、難しさうな顔をした。しかし弥十郎に向く

つて腹を立てたのではない。オロシヤ人の穢らはしい所業に腹を立て、腕組みをして天の一角を睨んだわけである。(58・6) △顔役は大きく腕組みをして、難しさうな顔をした。しかし弥十郎に向つて腹を立てたのではない。オロシヤ人の穢らはしい所業に腹を立て、腕組みをして天の一角を睨んだわけである。(23・2) ↓顔役は大きく腕を組み、難しい顔をして天の一角を睨んだ。しかし弥十郎に向かつて腹を立てたのではない。オロシヤ人の穢らはしい所業に対して腹を立てたわけである。(61・10) △

g 浜通りの居酒屋では、何の理由もなく(58・8) △ 浜通りの居酒屋では、何の理由もなく(23・2) ↓ 浜通りの居酒屋では何の理由もなく(61・12) △

g オロシヤ人が見た浜の女は、名は何と云ふか? (58・15) △ (23・2) ↓ オロシヤ人が見た浜の女は、名は何と云ふか? (62・4)

g 『これはまた、厳しい御詮議に(58・16) △ (23・2) ↓ 『これはまた、厳しい御詮議に(62・5)

g そして顔役は、決定的な口吻で(59・1) △ (23・2) ↓ そして顔役は、決定的な口吻で(62・8)

g オロシヤ人に断じてその女を見せないやうに、守護せねばならん。(59・2) △ (23・2) ↓ オロシヤ人に断じてその女を見せないやうに、守護せねばならん。(62・9) △

c それとなく顔を見合せた。(59・4) △ (23・3) ↓ それとなく顔を見合せた。(62・11)

g 懸想してゐる女を、無理やり(59・4) △ (23・3) ↓ 懸想してゐる女を、無理やり(62・11) △

○ 弥十郎は覺藏のため、ひと肌ぬぐ意気込みを顔に見せて顔役に云つた。

(59・5) △ (23・3) ↓ 弥十郎は顔役に云つた。(62・12)

d と云つた。(59・11) △ (23・4) ↓ といつた。(63・2)

g オロシヤといへば世界の果てだ、のう岩瀬通事、さうであらう? (59・15) △ (24・1) ↓ オロシヤといへば世界の果てだ、のう岩瀬通事、さうであらう? (63・6) △

○ 且つまた、オロシヤ人がその女の名を(60・5) △ (24・1) ↓ 尚ほまた、オロシヤ人がその女の名を(63・13)

g しかし、うっかり口をすべらすと、その女は尼にされる(60・7) △ (24・1) ↓ しかし、うっかり口をすべらすと、その女は尼にされる(64・2) △

○ おそらく、弥十郎の同役末永甚右衛門が(60・12) ▲ 明らかに、弥十郎の同役末永甚右衛門が(24・2) ↓ たぶん弥十郎の同役末永甚右衛門が(64・8)

× g おまにその噂は、百層倍も美談化されてゐる。(60・13) ▲ おまにその噂は、百層倍も美談化された噂である。(24・2) ↓ おまにその噂は、百層倍も美談化されてゐる。(64・9) △ 『今日』は

“け”を誤脱

× しかし弥十郎には通事としての彼の立場がある、彼はその噂を(60・15)

▲ しかし弥十郎には、通事としての彼の立場がある。彼はその噂を(24・2) ↓ しかし弥十郎には通事としての彼の立場がある。彼はその噂を(64・11)

e 飛語(60・16) △ (24・2) ↓ 蜚語(64・12)

○暗がりには提灯の灯が一つ見え、(61・7) ▲その暗がりには、提灯の灯

が一つ見え、(24・2) ↓暗がりには提灯の灯が一つ見え、(65・5)

○『何といふ名の女な?』(61・12) △(24・3) ↓「何といふく女か」  
(65・10)

○俺や考へたが、その女の頭、比丘尼に剃り落して(61・14) △俺や考へた  
が、その女の頭、比丘尼に剃り落して(24・4) ↓俺や、その女の頭  
を比丘尼に剃り落して(65・13)

○やらうと考へてをつたとところさ』／『いや、いけねえ。その女といふは、  
長州屋の若旦那にのぼせ切つてをるさうな。若旦那も満更でもないさ  
うな』／『ふん、そりや相手が悪い』／「一行空き」門口のところに  
(61・16) ↓(62・2) ▲やらうと考へてをつたとところさ』／「いや、いけ  
ねえ。その女といふは、長州屋の若旦那にのぼせ切つてをるさうな。若  
旦那も満更でもないさうな」／「ふん、そりや相手が悪い」／「第24回  
が終わり、第25回が始まる」文錦堂さん(七)／門口のところに(24・  
4) ↓(25・1) ↓やらうと考へてをつたとところさ』／「一行空き」門口の  
ところに(65・13) ↓(66・1) 「『満日』の「更」のルビは「ざら」かと  
思われるが、判読できない」

○顔役と手下の話し声は、その暗闇から聞こえるのである。／『棟梁。わつ  
ちも、長州屋の若旦那には義理があるのでな。それだによつて、ちと手  
を出しかねるのさ』／もう一人、別の手下らしい男のがらが声は聞こ  
えて来た。／『棟梁。わつちは新参で、長州屋には何の義理もねえ。  
それに女といふものは、悪性なものと定つてゐる。あの女の頭を比丘尼に  
しなせるなら、わつちにその役目を仰せつけてもらひてえ、頼む』／顔  
役は無雑作に承諾した。／『よからう、貴様に任した。所詮あの女は、

いつかは男とのいきさつで比丘尼にされる代物だ。ぐりぐり坊主に剃つ  
てしまへ』(62・4) ↓(11) ▲顔役と手下の話し声は、その暗闇から聞こ  
えるのである。／「棟梁。わつちも、長州屋の若旦那には義理があるの  
でな。それだによつて、ちと手を出しかねるのさ」／するともう一人、

別の手下らしい男のがらが声は聞こえた。／「棟梁。わつちは新参  
で、長州屋には何の義理もねえ。それに女といふものは、悪性なものと  
思つてゐる。それで万が一、あの女の頭を比丘尼にしなせるなら、わつち  
にその役目を仰せつけてもらひてえ、頼む」／顔役は今度は考へを変へ  
たものと見え、無雑作に承諾した。／「よからう、貴様に任した。所  
詮、あの女は、いつかは男のいきさつで比丘尼にされる代物だ。ぐりぐ  
り坊主に剃つてしまへ」(25・1) ↓顔役と手下の話し声は、その暗闇  
から聞こえるのである。／もう一人、別の手下らしい男のがらが声は  
聞こえて来た。／「棟梁。わつちはまだ新参だが、女の頭を比丘尼にし  
なせるなら、わつちにその役目を仰せつけてもらひてえ、頼む」／  
「よからう、貴様に任した。ぐりぐり坊主に剃つてしまへ」(66・3  
↓7)

○髪の毛を坊主にするはよいが、(63・1) ▲女の髪の毛を坊主にするは  
よいが、(25・2) ↓髪の毛を坊主にするのはよいが、(66・13)  
×かきさらすぞ』(63・2) △(25・2) ↓かきさらすぞ』(66・14)  
「『有光』は「」を使用するべきところ」

○女に因果を云ひ含めく前の浜に連れて行け。(63・6) ▲女に因果を云ひ  
含めて、前の浜に連れて行け。(25・2) ↓女に因果を云ひ含めて前の  
浜に連れて行け。(67・3)

cだが、貴様、周章くて耳など(63・7) ▲しかし貴様、周章て耳など

(25・2) ↓だが、貴様、周章でて耳など (67・4)

○さういふ無慙な企てについて話し合つてゐた。 (63・9) △(25・2) ↓  
そんな無慙ことを話し合つてゐた。 (67・7)

g 顔役は窓の明るみの届くところに来て、弥十郎に云つた。 (63・11) △(25・3) ↓顔役は窓の明るみの届くところに来て、弥十郎に云つた。 (67・9) △(25・3) ↓

た。 (67・9) △(25・3) ↓

○『通事殿、貴公、明日もまた (63・13) △(25・3) ↓「通事殿。明日もまた (67・11)

○『ではお顔役、 (63・16) △(25・3) ↓「お顔役、 (67・14)

○c h 顔役は暗闇のなかに引返した。そして提灯の明りを先きに立て、手下たちを連れて門口を出て行つた。／嵐が吹き去つた後のやうに静かになつた。／弥十郎は窓を閉め改めて覚蔵と顔を見合へせた。／覚蔵は下座にかしこまり、物におびえた目つきで弥十郎の顔を見詰めてゐた。 (63・17) △(25・4) ▲顔役は暗闇のなかに引返した。そして提灯の明りを先きに立て、手下たちを連れて門口を出て行つた。／嵐が吹き去つた後のやうに静かになつた。／弥十郎は窓の戸を閉めると、改めて覚蔵と顔を見合へせた。／覚蔵は下座にかしこまり、物におびえてゐる目つきで弥十郎の顔を見詰めてゐた。 (25・3) △(25・4) ↓顔役は暗闇のなかに消えて行つた。／嵐が吹き去つた後のやうに静かになつた。／弥十郎は窓を閉め改めて覚蔵と顔を見合へせた。／覚蔵は下座にかしこまり、物におびえた目つきで弥十郎の顔を見詰めてゐた。 (67・15) △(25・4)

【第四齣】 68頁～81頁 合計14頁

○深夜のこと「半扉 吉田貫三郎画」 (65頁) ↓第四齣 (68・5)

e 意気消沈 (66・2) △(26・1) ↓意気銷沈 (68・7)

g 明倫堂は御用学ぢや、それに儂は、 (66・9) ▲明倫堂は御用学ぢや。それに儂は、 (26・1) ↓明倫堂は御用学ぢや、それに儂は、 (69・2)

○太吉の声は、いつものやうに間延びのした声であつた。／『それでも先生は、北夷を防ぐには南蛮を討てと申されました』 (66・10) △(26・1) ↓「それでも先生は、北夷を防ぐには南蛮を討てと申されました」 (69・3)

a 講釈しておゐでになりました』 (66・13) △(26・1) ↓講釈しておいでになりました』 (69・5) △(26・6)

○今尚ほ思ひやるべしぢや』 (67・3) △(26・1) ↓今尚ほ思ひみるべしぢや』 (69・10)

g その話し声は、覚蔵の直ぐ後ろまで (66・4) △(26・2) ↓その話し声は、覚蔵の直ぐ後ろまで (69・11)

○g すると太吉の声が、覚蔵に追ひすがつて来た。 (67・4) △(26・2) ↓そして太吉の声が、覚蔵に追ひすがつて来た。 (69・11) △(26・12)

c 覚蔵の頭の先から爪先きまで (67・8) ▲覚蔵の頭の先から爪先きまで (26・2) ↓覚蔵の頭の先から爪先きまで (70・1)

g 覚蔵は懐から手を出して、鄭重に鶴賓先生にお辞儀をした。 (67・9) △(26・2) ↓覚蔵は懐から手を出して、鄭重に鶴賓先生にお辞儀をした。 (70・2)

○g だが、その後日の貴公の心懷 (67・14) ▲だが、その後日の、貴公の心懷 (26・2) ↓だが、その後日の貴公の心懷 (70・7)

g 覚蔵はまたお辞儀をして、先生に云つた。 (67・15) △(26・3) ↓覚蔵はまたお辞儀をして、先生に云つた。 (70・9)



○御面倒をかけく、(67・16) △(26・3) ↓御面倒をかけまして、(70・10)

a 鉄箱をぢつと見てをりました。(68・2く3) ▲挟箱をぢつと見てをりました。(26・4) ↓鉄箱をじつと見てをりました。(70・13く14)

a d 後ろ姿をぢつと見てをりました』(68・3) △(26・4) ↓後ろ姿をじつと見て居りました』(70・14)

×反つてつらいのぢや』(68・5) △(26・4) ↓反つてつらいのぢや。

(71・1) 「『有光』の。＼は。＼を用いるべきところ」

g 鶴賓先生はさう云つて、先きに立つて歩き出した。(68・7) △(27・

1) ↓鶴賓先生はさう云つてく先きに立つて歩き出した。(71・3)

c g 覚蔵が、周章くてそれを打ち消した。(68・13) △覚蔵が、周章てそれを打ち消した。(27・1) ↓覚蔵がく周章ててそれを打ち消した。(71

・10)

○研鑽に餘念がないことぢやらう』(69・16く17) △(27・2) ↓研鑽に餘

念がないさうな』(73・1く2)

e 古実をたづねるのぢや。(70・3) △(27・3) ↓故実をたづねるのぢ

や。(73・5)

g 『いや、一向に』(70・7) △(27・3) ↓「いやく一向に」(73・9)

×カンボチャ、阿媽、チャンバ(70・11) ▲カンボチャ、阿媽港、チャンバ

(27・4) ↓カンボチャ、阿媽、チャンバ(73・13) 「『阿媽』は『阿

媽港』(現在のマカオを指す)とあるべきところ」

e g なければ古実がわからぬのでく一お役所へ献言できぬさうな。(70・11

く12) ▲なければ献言できぬさうな。(27・4) ↓なければ故実がわか

らぬので、お役所へ献言できぬさうな。(73・13く14)

h ことぢやらう』／「一行空き」／オロシヤ船は暗い海上に、黒くうづくま  
った感じで浮んでゐた。(70・12く13) ▲ことぢやらう』／「第27回が  
終わり、第28回が始まる」深夜のこと(三)／オロシヤ船は暗い海上  
に、黒くうづくまった感じで浮んでゐた。(27・4く28・1) ↓ことぢ  
やらう』／くオロシヤ船は暗い海上に、黒くうづくまった感じで浮んで  
ゐた。(73・15く74・1)

○『何やら、寂寞ぢやく。この景色を見てをると、はてしないかのごとき気  
持ちやわい』(71・3) △(28・1) ↓「何やら、寂寞ぢやわい。この  
景色を見てをると、はてしないかのごとき気持ちやく」(74・6)

g 『はて、覚蔵殿は、まだ塞ぎの蟲か。(71・6) ▲「はて、覚蔵殿はま  
だ。塞ぎの蟲か。(28・1) ↓「はて、覚蔵殿はくまだ塞ぎの蟲か。

(74・9)

c 殆ど醜態ぢや』(71・7) △殆ど醜態ぢや』(28・1) ↓殆んど醜態ぢ  
や』(74・10)

d 腰を叩してゐた。(72・10く11) △(28・3) ↓腰をおろしてゐた。(76

・2)

h 『一軒、二軒、三軒目。いざ飲みに行かう』／「一行空き」／これが町場  
の居酒屋なら夜更けてからの商ひは御法度である。(72・17く73・1)

▲「一軒、二軒、三軒目。いざ、飲みに行かう」／「第28回が終わり、  
第29回が始まる」深夜のこと(四)／これが町場の居酒屋なら夜更けて

からの商ひは御法度である。(28・4く29・1) ↓「一軒、二軒、三軒

目。いざ飲みに行かう」／くこれが町場の居酒屋なら夜更けてからの商

ひは御法度である。(76・8く9)

×権右衛門店(73・3) △権右衛門店(29・1) ↓権右衛門く(76・11)



だ。殆んど黙読するやうに、ごく低声に読んだのである。(80・1)

3) ▲「これをお聞き下さい。オロシヤ人は、このやうな返答をします」／嘆山先生といふ飲み助は、懷紙に書き写した問答の聞き書きを読んだ。殆んど黙読するやうに、声をひそめて読んだのである。

(31・1) ↓嘆山先生といふ飲み助は殆んど黙読するやうに、ごく低声に読んだのである。(82・2)

g f ニコライ・バルトルイラ・レザノツト侯爵に御座候<——(80・5) △

(31・1) ↓ニコライ・バルトルイツチ・レザノツト侯爵に御座候。

——(82・4)

○ g 『左様、気まぐれではあるまいな。して、いまその貴公の読んだ、セント

トアンナ第一等勲章(80・7) ▲「もとより、気まぐれではあるまいな。して、いまその貴公の読んだ、セントアンナ第一等勲章(31・1)

↓<して、いまその貴公の読んだセントアンナ第一等勲章(82・7)

g 信牌の儀<一右はこのたび(80・13) 14) ▲信牌の儀、右はこのたび(31

・2) ↓信牌の儀、右はこのたび(83・2)

○ 持参いたされ候や——して、ここにこのやうな(80・14) △(31・2) ↓

持参いたされ候や——ここにこのやうな(83・2)

a h 鶴賓先生はぢつと考へ込んでゐた。／嘆山先生はその続きを読んだ。

(81・2) 3) △(31・2) ↓鶴賓先生はじつと考へ込んでゐた。<嘆

山先生はその続きを読んだ。(83・4)

○ g 『一、検使曰く御座います。右の次第は、長崎奉行所へ(81・4) ▲

「一、検使曰く御座いますな。右の次第は、長崎奉行所へ(31・2)

↓「一、検使曰く、右の次第は<長崎奉行所へ(83・5)

h 鶴賓先生は筆に矢立の墨を含ませた。／嘆山先生は煙管で(81・8) 9)

▲鶴賓先生は懷紙を左手に持ち、筆に矢立の墨を含ませた。／嘆山先生は煙草で(31・2) ↓鶴賓先生は筆に矢立の墨を含ませた。<嘆山先生は煙管で(83・10)

○ 『野望あるもの、用意周到ぢや』／鶴賓先生は筆に墨をたつぶりつけ足して、その続きをすらすらと筆記した。／『検使の問ひ。(81・12) 14)

▲「用意周到ぢや」／鶴賓先生は筆に墨をつけ足して、その続きをすらすらと、筆記した。(31・2) 3) ↓「野望あるもの、用意周到ぢや」

／<「検使の問ひ。(83・14) 15)

○ 『御ン答へ……オロシヤ使節の答へで御座います——(82・10) △(32・

1) ↓「御ン答へ。オロシヤ使節の答へで御座います——(84・14)

e 南極の水界(83・2) △(32・2) ↓南極の水海(85・9)

d そのとき店の奥の仕切りを明け、(83・14) ▲そのとき、店の奥の仕切り

を明け、(32・3) 4) ↓そのとき店の奥の仕切りを明け、(86・6)

×ヤエノといふ娘である。(81・1) △ヤエノといふ娘である。(32・4)

↓ヤエノといふ娘である。(86・10)

○ 嘆山先生は女の素振りを一向に感じようとしなかつた。女の注いだ酒を一

息に飲みほして、(84・2) ▲問答の書き写しを読んでもた嘆山先生

は、女の素振りを一向感じしようとしなかつた。女の注いだ酒を一息に

飲みほして、(33・1) ↓嘆山先生は女の注いだ酒を一息に飲みほし

て、(86・11) 「『満日』の「感じしよう」との「し」は衍字か」

× f 御ン答へ——。されば、当ナデジダ号の乗組員(84・13) ▲御ン答へ

——。されば、当ナデジダ号の乗組員(33・1) ↓御ン答へ——。され

ば、当ナデジダ号の乗組員(87・8) 「他の箇所形式に合わせれば、

二倍ダーシに続く句点。」「は不要」

×夏の候にても、降る雨は氷雨の時雨に御座候。(85・6・7) △(33・

2) ↓夏の候にてく、降る雨は氷雨の時雨に御座候。(88・3) 「『有

光』は前後の文脈に照らせば、『も』が誤脱」

h故国の山川草木を慕ひ、望郷の念に耐へがたき者どもに御座候。／「一行

空き」／問ひ——右、四名の石ノ巻の船頭のほか、(86・1・3) △故

国の山川草木を慕ひ、望郷の念に耐へがたき者どもに御座候。／「第33

回が終わり、第34回が始まる」転写の夜(四)／問ひ——右、四名の石

ノ巻の船頭のほか(33・4・34・1)、↓故国の山川草木を慕ひ、望郷

の念に耐へがたき者どもに御座候。／<問ひ——右、四名の石ノ巻の船

頭のほか、(89・1・2)

×審しき事に御座候。(86・13) △(34・1) ↓審しき事に御座候。(89・

12・13) 「『不審しき』とあるべきところ。なお、『満日』の『審しき

事』にはルビはない」

c日本漂民の不仕合くせなる境涯(86・14・15) △(34・1) ↓日本漂民の

不仕合はせなる境涯(89・14・15)

d去れば右の次第(87・4) △(34・2) ↓去れば右の次第(90・5)

d長崎御奉行所へお取次ぎいたしたき故(87・4) △(34・2) ↓長崎御奉

行所へ御取次ぎいたしたき故(90・5)

×g使節の御ン申入れ——然らば、わがナデジタ号は只今より、波静かなる

セトウミに廻船つかまつるべく候。／検使のお答へ——その儀、承引い

たし難く候。<(88・8・10) ▲使節の御ン申入れ——然らば、わがナ

デジタ号は、只今より波静かなるセトウミに廻船つかまつるべく候。／

検使のお答へ——その儀、承引いたし難く候。(35・1) ↓使節の御ン

申入れ——然らば、わがナデジタ号は只今より、波静かなるセトウミに

廻船つかまつるべく候。／検使のお答へ——その儀、承引いたし難く

候。／使節の御ン申入れ——然らば、わがナデジタ号は只今より、波静

かなるセトウミに廻船つかまつるべく候。／検使のお答へ——その儀、

承引いたし難く候。(91・12・92・3) 「『今日』の本文88頁8行目、

9行目が、『有光』では91頁12行目、14行目及び92頁1行目、3行目の

二箇所にて誤って印刷されている」

eお怠屈で御座いましつらう(89・8) △(35・2) ↓お怠屈で御座いま

しつらう(93・3)

e『怠屈どころか、(89・10) △(35・2) ↓「退屈どころか、(93・5)

a意味ありげにじつと(90・6・7) △(35・4) ↓意味ありげにじつと

(94・5)

○『はて、覚蔵氏は何をしとるのぢやらう』／「一行空き」／鶴賓先生は忙

しさに山羊ひげをしごき、ちよつと難しい顔をして嘆山先生に云つ

た。老先生は最早や酔ひを発してゐたのである。／「中略」／『それと

いひこれといひ、最早や、何となく儂は寂寞ぢや』／鶴賓先生は、目を

閉ぢて湯呑みの冷たくなつた酒を飲んだ。(90・9・94・8) ▲「は

て、覚蔵氏は何をしとるのぢやらう」／「第35回が終わり、第36回が始

まる」転写の夜(六)／鶴賓先生は忙しさに山羊ひげをしごき、ちよ

つと難しい顔をして嘆山先生に云つた。老先生は最早や酔ひを発してゐ

たのである。／「中略」／「それといひこれといひ、最早や、何となく

末世ぢや」／鶴賓先生は、目を閉ぢて湯呑みの冷たくなつた酒を飲ん

だ。(35・4・37・3) ↓「はて、覚蔵氏は何をしとるのぢやらう」／

「一行空き」／鶴賓先生は、目を閉ぢて湯呑みの冷たくなつた酒を飲

んだ。(94・7・8) 「『有光』は、『今日』90頁10行目(90頁9行目

と10行目の間に一行空きがある。→94頁7行目を削除する。その削除部分は、『満日』第36回全部と第37回の大半に相当し、ヤエノを「ニンホーマーニア」（「色欲の多量すぎる病患の謂」）だとする鶴賓と嘆山との会話を描く」

hさう云つて、骰子を頭の髻のなかに藏つた。／「一行空き」／その男はやをら立ちあがつた。（94・16→95・1）▲さう云つて、骰子<sup>さい</sup>を頭の髻<sup>たづな</sup>のなかに藏つた。／「第37回が終わり、第38回が始まる」転写の夜（八）／髻のなかに骰子をかくした男はやをら立ちあがつた。（37・4→38・1）↓さう云つて、骰子を頭の髻のなかに藏つた。／その男はやをら立ちあがつた。（95・2→3）

g見るからに、品のよくない町奴の風体である。（95・1→2）△（38・1）↓見るからに品<sup>く</sup>のよくない町奴の風体である。（95・3→4）

○すこし顔を貸してもれひてえのさ。姐御ちよつと失礼……』（95・6）▲

すこし顔を貸してもれひてえのさ。姐御、ちよつと失礼……」（38・1）↓すこし顔を貸してもれひてえ」（95・8）

○『すこし顔を貸してもれえてえ。手間はとらさねえといふことさ』（95・9）△（38・1）↓「顔を貸してもれえてえ。手間はとらさねえといふことさ」（95・11）

○『姐御、すまねえ。ところがこの世には、（95・13）△（38・1）↓「姐御。ところがこの世には、（95・15）

○『あたしを、誰だと思ふのさ。かう見えてもあたしは堅気の女だよ、穀類屋の七兵衛店の娘だよ』（96・1）▲「あたしを、誰だと思ふのさ。かう見えても、あたしは堅気の女だよ、穀類屋の七兵衛店の娘だよ」（38・2）↓「あたしを、誰だと思ふのさ。穀類屋の七兵衛店の娘だよ」

（96・5）

○hおやぢはとび起きて、／「何ちやい、何ちやい」／さう云つて、尻端折りをして土間にとび降りた。（96・7→9）△（38・2）↓おやぢはとび起きて、＜「何ちやい、何ちやい」と、尻端折りをして土間にとび降りた。（96・12）

○h『おやぢ、余計なことをすると腕をへし折るぞ』／と威かした。凄い見幕である。／おやぢは目をこすつて、そのまゝ棒立ちになつて黙り込んだ。／扉之助は何の抵抗も受けないで、（96・13→16）▲「おやぢ、余計なことをすると、腕をへし折るぞ」／と威かした。凄い見幕である。／おやぢは目をこすつて、そのまゝ棒立ちになつて黙り込んだ。／扉之助は、何の抵抗も受けないで、（38・2）↓「余計なことをすると腕をへし折るぞ」／と威かした。凄い見幕である。＜おやぢは目をこすつて、そのまゝ棒立ちになつて黙り込んだ。／扉之助は何の抵抗も受けないで、（97・1→3）

e手元があぶねえ。（97・2）△（38・3）↓手許があぶねえ。（97・6）

○髻<sup>まげ</sup>だけ切り落すんだ。（97・2→3）△髻<sup>まげ</sup>だけ切り落すんだ。（38・3）

↓髻<sup>まげ</sup>だけ切り落す。（97・6→7）

○よく知らねえが、姐御、白ばつくれるな。何も因果といふものだろうさ』（97・6）△よく知らねえが、姐御、白■つくれるな。何も因果といふものだろうさ」（38・4）↓よく知らねえが、＜何も因果といふものだろうさ」（97・10）「『満日』の■は「ば」とも「ほ」とも判読し難いが、仮に「ば」としておく」

c申し合<sup>あ</sup>はせたやうに、（97・10）△（39・1）↓申し合<sup>あ</sup>はせたやうに、（97・14）

◎鼻の低い方が拳骨をかため、／『待てツ、どこへ行くか』／と呼びとめた。(97・11ゝ13) △(39・1) ↓鼻の低い方が拳骨をかためて呼びとめた。／「待てツ、どこへ行くか」(98・1ゝ2)

×目のただれた方の町奴が(97・14) △(39・1) ↓目をただれた方の町奴(98・3)

○『ま』豪傑諸君、静かにするがよい。(98・3) ▲「豪傑諸君、静かにするがよい。(39・1) ↓「豪傑諸君、静かにするがよい。(98・8)

○いまや<危急存亡の秋、(98・3) △(39・1) ↓いまや国家危急存亡の秋、(98・8)

gところが、鼻の低い方の町奴が、(98・4) △(39・1) ↓ところが鼻の低い方の町奴が、(98・10)

○h『豪傑諸君、名乗りを挙げなくては卑怯だらう』／二人の町奴は目を怒らせ、物をも云はずに嘆山先生に打つて来た。／嘆山先生はそれを外し、／『ばか者ども！』／と一喝くらはした。(98・7ゝ11) ▲「豪傑

諸君、名乗りを挙げなくては卑怯だらう」／二人の町奴は目を怒らせ、物をも云はずに嘆山先生に打つて来た。／嘆山先生は、／「ばか者ども！」／と一喝くらはし叫んだ。(39・1ゝ2) ↓「豪傑諸君、<卑

怯だらう」／二人の町奴は目を怒らせ、物をも云はずに嘆山先生に打つて来た。<嘆山先生はそれを外し、／「ばか者ども！」／と一喝くらはした。(98・13ゝ99・1)

hいづれも脾腹を突かれたのである。／嘆山先生は今度は(98・12ゝ13) △(39・2) ↓いづれも脾腹を突かれたのである。<嘆山先生は今度は(99・2)

h俯伏しになつたまゝ黙つてゐた。／土間のなかは森閑とした。(98・16ゝ

99・1) △(39・2) ↓俯伏しになつたまゝ黙つてゐた。<土間のなかは森閑とした。(99・5ゝ6)

eそこへ駈けつけたのか、(99・2) △(39・2) ↓そこへ駈けつけたのか、(99・7)

d露路からきこえて来た。(99・2) △(39・2) ↓露路からきこえてきた。(99・7)

gするていと、坊主と比丘尼の道行きを、棧席で見物できようといふものだ。(99・12ゝ13) ▲するていと坊主と比丘尼の道行きを、棧席で見物

できようといふもさね。(39・4) ↓するていと、坊主と比丘尼の道行きを<棧席で見物できようといふものだ。(100・2ゝ3) 「いづれも

“棧席”は“棧敷”とあるべきか」

○よくせき一生懸命になつてゐたのである。(99・15ゝ16) △(40・1) ↓よくせき一生懸命になつてゐたのだらう。(100・5ゝ6)

○拙者の頭を坊主にしてもらひたい』／扉之助は、まるで軽くあしらつた。／『脂っこい野郎だな、てめい。そんなに坊主になりたくば、(100・3

ゝ5) ▲拙者の頭を坊主にしてもらひたい」／扉之助は、まるで軽くあしらつた。／「ふん、脂っこい野郎だな、てめい。そんなに坊主になり

たくば、(40・1) ↓拙者の頭を坊主にしてもらひたい」／<てめい、そんなに坊主になりたくば、(100・9ゝ10)

e駈け出して来る足音が(100・9) △(40・1) ↓駈け出して来る足音が(100・14)

e明るみのなかに駈け出して来た。(100・10) ▲明るみのなかに駈け出して来たのである。(40・1) ↓明るみのなかに駈け出して来た。(101・1)

e 土間のなかに駈け込んだ。(100・11) △(40・1) ↓土間のなかに駈け込んだ。(101・2)

○とび出して来た。(100・12) △(40・2) ↓とび出した。(101・3)

○g 手間どりました』／『忝けない』／嘆山先生は、提灯を太吉の手から受取ると、(100・14) ↓(15) ▲手間どりました』／『忝けない』／嘆山先生は、提灯を太吉の手から受取ると、(40・2) ↓手間どりました』／<嘆山先生は<提灯を太吉の手から受取ると、(101・4) ↓(5) 「『満日』の“は”は“の誤植」

a h ちつと俯伏しになつてゐた。／篝火の明るみで、(101・3) ↓(5) △(40・2) ↓じつと俯伏しになつてゐた。<篝火の明るみで、(101・11) ↓(12)

◎虚空に突き出して、／『さあ殺せ、さあ殺せ』／と不貞腐れて呼ばはつた。(101・11) ↓(14) △(40・3) ↓虚空に突き出して不貞腐れて呼ばはつた。／「さあ殺せ、さあ殺せ」(102・4) ↓(5)

×嘆山先生は暗い露路のなかを(101・15) △(40・4) ↓嘆山<は暗い露路のなかを(102・6) 「『有光』は“先生”が誤脱」

○『お怪我はなかつたかな、貴公。さあ、早く出て来て、いまのうちに(101・16) △(40・4) ↓「お怪我はなかつたかな、<さあ、早く出ておいで。いまのうちに(102・7)

○恥しさに覚蔵が答へた。(101・17) △恥しさに覚蔵が答へた。(40・4) ↓恥しうな声で覚蔵が答へた。(102・8)

c 早く家に帰るがよい』(102・4) △早く家に帰るがよい』(41・1) ↓早く家に帰るがよい』(102・12) ↓(13)

c たうてい恥しくて(102・7) △たうてい恥しくて(41・1) ↓たうてい

恥かしくて(103・2) ↓(3)

h 大きな声であつた。／扉之助はとび起きた。／嘆山先生はもう一つ、一喝くらはした。(102・12) ↓(14) △(41・1) ↓大きな声であつた。<扉之助はとび起きた。<嘆山先生はもう一つ、一喝くらはした。(103・8)

g 二人の相棒を、両腕に抱きとつて(102・16) ↓(103・1) △(41・1) ↓二人の相棒<を両腕に抱きとつて(103・11)

a どうしておみでになりませうか？』(103・5) △(41・1) ↓どうしておいでになりませうか？』(103・15)

○『老先生は、いま店のなかにおいでになる。おそろくは老先生、乃公の腕力沙汰を颯颯しておみでになるだらう。老先生のお供も、(103・6) ↓(7)

7) ▲「老先生は、いま店のなかにおみでになる。おそろくは老先生、乃公の腕力沙汰を颯颯しておみでになるだらう。老先生のお供も、(41・2) ↓「老先生は、いま店のなかにおみでになる。<老先生のお供も、(104・1)

○例の女子も店のなかに(103・7) △(41・2) ↓女子も店のなかに(104・1) ↓(2)

e 落ちてゐる髻(103・9) △(41・2) ↓落ちてゐる髻(104・3)

e 提灯と髻(103・13) △(41・2) ↓提灯と髻(104・7)

e その髻を太吉は(103・13) △(41・2) ↓その髻を太吉は(104・7)

e 髻といふものは、(103・15) △(41・2) ↓髻といふものは、(104・9)

e 差上げた髻で(103・16) △(41・2) ↓差上げた髻で(104・10)

e 『この髻は、(104・2) △(41・3) ↓「この髻は、(104・14)

h 娘も返事をしなかつた。／鶴賓先生は苦い顔をして、(104・4) ↓(5) △(41・3) ↓娘も返事をしなかつた。<鶴賓先生は苦い顔をして、(105

・ 1)

○鶴賓先生は一分銀を四つとり出して、ふらふらしながら (104・7) △ (41・4) ↓そして一分銀を四つとり出して、ふらふらしながら (105・3)

【第六齣】 105頁〜120頁 合計16頁

○移風易俗の章 (半扉 吉田貫三郎画) (105頁) ↓第六齣 (105・4)

c 踏み荒らされてゐた。 (106・1) △踏み荒らされてゐた。 (42・1) ↓踏み荒らされてゐた。 (105・5)

c 踏み荒らされた柳の苗床 (106・8) △踏み荒らされた柳の苗床 (42・1) ↓踏み荒らされた柳の苗床 (105・10)

g 先生がうつかりしてゐる間に、人夫等が (106・10) △先生がうつかりしてゐる間に、人夫等が (42・1) ↓先生がうつかりしてゐる間に、人夫等が (105・12)

g 人夫等は、数本の杣を地面に打ち込むと、 (106・11) △ (42・1) ↓人夫等は、数本の杣を地面に打ち込むと、 (106・1)

g 手を触れると、枯れるのぢや (106・16) ▲手を触ると、枯れるのぢや (42・2) ↓手を触れると、枯れるのぢや (106・6)

b 太吉が鋤をかついで (107・1) ▲太吉が鋤をかついで (42・2) ↓太吉が鋤をかついで (106・7)

d 今度は嘆山先生が障子を明け (107・1) △ (42・2) 今度は嘆山先生が障子を明け (106・7)

c 嘆山先生は老先生に向ひ、 (107・8) △嘆山先生は老先生に向ひ、 (42・2) ↓嘆山先生は老先生に向ひ (106・14)

×嘆山先生は老先生を間吟塾まで見送つて、 (107・8) △ (42・2) ↓

嘆山先生は老先生を間吟塾まで見送つて、 (106・14) △ (15)

×嘆山先生も若い塾生と (107・13) △ (42・2) ↓嘆山先生も若い塾生と (107・4)

○鶴賓先生は尻端折りをおろし、三人に對つて黙礼した。そしてまた尻端折りをして、鋤で土を (107・15) △ (42・3) ↓鶴賓先生は、三人に向つて目礼をした。そしてまた鋤で土を (107・6)

d 二行目からで御座います (108・2) △ (42・3) ↓二行目からでございませ (107・9)

h 少年はいつもより尚ほ堅くなつてゐたのである。／「一行空き」／鶴賓先生は柳の苗を掘り起しながら、いつもの通り朗読調で講釈した。 (108・7) △少年はいつもより尚ほ堅くなつてゐたのである。／「第42回

が終わり、第43回が始まる」移風易俗の章 (二)／鶴賓先生は柳の苗を掘り起しながら、いつもの通り朗読調で講釈した。 (42・4) △ (43・1)

↓少年はいつもより尚ほ堅くなつてゐたのである。／鶴賓先生は柳の苗を掘り起しながら、いつもの通り朗読調で講釈した。 (107・15) △ (108・1)

c 殆んど縁側の方に背を向けて (109・6) △殆んど縁側の方に背を向けて (43・2) ↓殆んど縁側の方に背を向けて (108・15)

g 『鄭声とは、雅楽を妨げ風俗をやぶる、淫声の楽なのぢや。 (109・7) △ (43・2) ↓「鄭声とは、雅楽を妨げ風俗をやぶる。淫声の楽なのぢや。 (109・1)

○ a これ淫楽は世をみだり、国を亡ぼす道理あるを云ふたものぢや。すべて、淫声は淫楽をともなひ、淫声は煩手をとみなふ。今日の歌舞音曲、三絃俗楽、煩手に終止する淫楽ぢや。これ、世を乱し国を亡ぼすの音楽

三絃俗楽、煩手に終止する淫楽ぢや。これ、世を乱し国を亡ぼすの音楽



ぢや』(109・8→10) ▲これ淫楽は世をみだり、国を亡ぼす道理あるを云ふたものぢや。すべて、淫声は淫楽をともし、淫声は煩手をともしふ。今日の歌舞音曲、三絃俗楽、煩手に終止する淫楽ぢや。これ、世を乱し、国を亡ぼすの音楽ぢや」(43・2) ↓これ淫楽は世をみだり、国を亡ぼす道理あるを云うたものぢや」(109・2→3)

○声を張りあげて、大きな声で読むのぢや』(109・12) △(43・2) ↓大きな声で読むのぢや」(109・5)

aいま儂の云ふたことがわからぬでもよい。(109・16) △(43・3) ↓いま儂の云うたことがわからぬでもよい。(109・9→10)

aいま儂の云ふたことが自づから(109・17→110・1) △(43・3) ↓いま儂の云うたことが自づから(109・11)

hふと太吉の騒々しい声をきつけた。／太吉の声は、表の木戸口の方から(110・2→3) ▲不図、そのとき、太吉の騒々しい声をきつけた。／

太吉の声は、表の木戸口の方から(43・3→4) ↓ふと太吉の騒々しい声をきつけた。／太吉の声は、表の木戸口の方から(109・12→13)

hどうか、お静かに願ひします』／「一行空き」／闖入者の甲高い声がきこえた。(110・6→7) ▲どうか、お静かに願ひします」／「第43回

が終わり、第44回が始まる」移風易俗の章(三)／闖入者の甲高い声がきこえた。(43・4→44・1) ↓どうか、お静かに願ひします」／

闖入者の甲高い声がきこえた。(109・15→110・1)

○闖入者の口吻によると、どうやら覚蔵が(111・1) △(44・1) ↓闖入者の

の口吻によると、覚蔵が(110・11)

aぢつと聞き耳たてゝゐた。(110・3) △(44・1) ↓じつと聞き耳たてて

ゐた。(110・13)

○『はて、何ごとぢやらうな。覚蔵氏が追手に迫られてをるやうぢや。貴公、御苦労ぢやが、(111・4) ▲「はて、何ごとぢやらうな。覚蔵が追手に迫られてをるやうぢや。貴公、御苦労ぢやが、(44・1→2) ↓「はて、何ごとぢやらうな。貴公、御苦労ぢやが、(110・14)

○さう云つて鶴賓先生が柳の苗床を出ると、嘆山先生は周章で云つた。／

『先生、私は浅学で御座います。それに私の祖述いたしますは、陸王二子の学派で御座います。幼い塾生衆に、いかゞなもので御座いませうか?』／しかし鶴賓先生は、／『心配ない』／と云ひ残し、せかせかと

表の方に出て行つた。／案の定、闖入者は表の木戸口のところで(111・6→12) ▲さう云つて鶴賓先生が柳の苗床を出ると、嘆山先生は周章で

云つた。／「先生、私は浅学で御座います。それに私の祖述いたしますは、陸王二子の学派で御座います。幼い塾生衆には、いかゞなもので御

座いませうか?」／しかし鶴賓先生は、／「心配ない。小生もまた、陽明太虚の説じや。よろしく頼む」／と云ひ残し、せかせかと裏庭から表

の方に出て行つた。／案の定、闖入者は表の木戸口のところで(44・2) ↓さう云つて鶴賓先生は苗床を出た。／

○手をはさんばかりにして云ひすがつてゐた。(111・12→13) △(44・2) ↓手をはさんばかりに云ひすがつてゐた。(111・2→3)

g鶴賓先生は、その押し問答のなかに(112・1) △(44・2) ↓鶴賓先生は

その押し問答のなかに(111・9)

h見れば、顔に見覚えのある文錦堂の番頭丁三郎である。／丁三郎の方で

も、(112・3→4) ▲見れば、顔に見覚えのある文錦堂の番頭丁三郎であつた。／丁三郎の方でも、(44・3) ↓見れば、顔に見覚えのある文

錦堂の番頭丁三郎である。＜丁三郎の方でも、（111・11）

○『先生は、天晴れ仁者で御座いますスな？』（112・11）△（44・4）↓

「先生は、天晴れ仁者で御座いますくな？」（112・3）

○g鶴賓先生は、氣を悪くして呟いた。（112・12）△（45・1）↓鶴賓先生は氣を悪くした。（112・4）

○g仁者ぢや故に＜下僕に缺箱をかつがせて、覺藏師が女子を出張りに行くお供につけて（113・1）↓2）▲先生は仁者ぢや故に、下僕に挟箱をかつがせて、覺藏師が女子を出張りに行くお供につけて（45・1）↓仁者ぢや故に、下僕に缺箱をかつがせて、覺藏師が女子を出張りに行くお供をつけて（112・9）↓10）

○番頭は聊かの手加減もなく云った。（113・7）△（45・1）↓番頭は何の手加減もなく云った。（113・2）

○はつきりとお伺ひしますスが、（113・8）△（45・1）↓はつきりとお伺ひしますスが、（113・3）

eあの男は髻を失せさしたのぢや（114・1）▲あの男は髻を失せさしたのぢや」（45・2）↓あの男は髻を失せさしたのぢや」（113・13）

「『満日』の“せ”は衍字」

e髻を失せさせる（114・3）△（45・2）↓髻を失せさせる（113・15）

○わけは御座せぬスわ（114・3）↓4）▲わけは御座いませぬスわ」（45・2）↓わけは御座せぬスわ（113・15）↓114・1）

gそして先生は、太吉に云ひつけた。（114・6）△（45・2）↓そして先生は太吉に云ひつけた。（114・3）

○e『太吉。ゆんべの覺藏の髻が、（114・7）△（45・2）↓「ゆんべの覺藏の髻が、（114・4）

e h太吉は駈け出して行つた。／番頭はそれでも尚ほ、（114・8）↓9）△

（45・3）↓太吉は駈け出して行つた。＜番頭はそれでも尚ほ、（114・5）

○覺藏師が版下絵を七枚描くことになつとりますスが、どうなることやら心配なのスわ。（114・11）↓12）△（45・3）↓覺藏師が版下絵を七枚描くことになつてをつたスが、どうなつたことやら心配スわ。（114・7）

8）

○絵が出来さにないので逃げ出したかも知からぬスわ。（114・12）△（45・3）↓4）↓絵をそのままにして逃げ出したかも知からぬスわ。（114・8）

・8）「『今日』の“出来さにない”は“出来さうにない”の誤植か」  
eよしんば髻を（114・12）△（45・4）↓よしんば髻を（114・8）↓9）

○子供の隠れんぼのやうなことをしてもらつては我慢ならぬス。出て来たら、ひつ掴まへて描かしてやるス」（114・13）↓14）▲子供の隠れんぼのやうなことをしてもらつては我慢ならぬスわ」（114・9）

描かしてやるス」（45・4）↓子供の隠れんぼのやうなことをしてもらつては我慢ならぬスわ」（114・9）

e包んだ髻（114・15）△（45・4）↓包んだ髻（114・10）

e彼はその髻を、（114・15）△（45・4）↓彼はその髻を、（114・10）

○e『いかにです、この髻は、（114・16）△（45・4）↓「この髻は、（114・11）

e太吉はその髻を（115・1）△（46・1）↓太吉はその髻を（114・12）

○g『番頭さん、ほうら、この通り、地鑑の、（115・2）▲「番頭さん、ほうらこの通り、地鑑の、（46・1）↓「ほくらこの通り、地鑑の、（114・13）

○ g 彩絹の元結は簪上ではないスか、と仰有つたことが (115・3・4) △ (46・1) ↓ 彩絹の元結は簪上ではないかと仰有つたことが (114・14)

e その髻の髻つけ油 (115・5) △ (46・1) ↓ その髻の髻つけ油 (115・1)

c 『いや、確かにそれは (115・6) △ 「いや、確にそれは (46・1) ↓ 「いや、確かにそれは (115・2)

e 覚蔵師の髻に違ひないスわ。何で覚蔵師は髻を (115・6) △ (46・1) ↓ 覚蔵師の髻に違ひないスわ。何で覚蔵師は髻を (115・2)

○ 手に入れたスカ』／文錦堂の番頭は、呆れた顔で太吉の顔を見た。／太吉は寧ろ得意然として答へた。 (115・7・9) △ (46・1) ↓ 手に入れたスカ』／太吉は寧ろ得意然として答へた。 (115・3・4)

○ 『はて、何といふ名の (115・12) △ (46・1) ↓ 「何といふ名の (115・7)

○ a e h 『その通り、覚蔵様は無慙に髻を切られてしまはれました』／太吉は思ひなほしたやうに声を落し、／『全く、お気の毒なことで御座いました。＜覚蔵様はそれで今日、頭を覆面しておみでになるので御座いませう』／さう云つて、太吉はぼそぼそと懐紙に髻を包んだ。／『この髻は、 (116・5・10) △ 「その通り、覚蔵様は無慙に髻を切られてしまはれました」／太吉は思ひなほしたやうに声を落し、／「全く、お気の毒なことで御座いました。覚蔵様はそれで今日、頭を覆面しておみでになるので御座いませう」／「さう云つて、太吉はぼそくと懐紙に髻を包んだ。／「この髻は、 (46・2) ↓ 「その通り、覚蔵様は無慙に髻を切られてしまはれました。お気の毒なことで御座いました。それで覚蔵様は、顔を覆面しておいでになるので御座いませう」／太吉はぼそ

と懐紙に髻を包んだ。／「この髻は、 (116・2・5)

○ お店を縮尻りますスわ。 (116・14) △ (46・2) ↓ お店を縮尻りますわ。 (116・9)

e 番頭は背がひくいので、 (117・1) △ (46・3) ↓ 番頭は脊がひくいので、 (116・13)

○ お店大事とあの女を大事にしてをりましたス。しかし乍らスな、私は自分から求めて、あの女と仲よくした覚えは毛頭ないのスわ。世間では、 (117・5・6) ▲ お店大事とあの女を大事にしてをりましたス。しかし乍らスな、私は自分から求めて、あの女と仲よくした覚えは毛頭ないのスわ。世間では、 (46・4) ↓ お店大事とあの女を大事にしてをりましたス。世間では、 (117・2)

a 私に心中だてするためだと云ふてをるさうスが、 (117・6・7) ▲ 私に心中だてするためだと云つてをるさうスが、 (46・4) ↓ 私に心中だてするためだと云うてをるさうスが、 (117・3)

○ この私がまた女ぎらひと来てをりますわ』 (117・7) △ (46・4) ↓ この私がまた女ぎらひと来てをるスわ』 (117・3・4)

e 苦虫 (117・8) △ (47・1) ↓ 苦蟲 (117・5)

h 文錦堂の番頭のおしやべりをきいてゐた。／番頭はべらべらと云ふのである。 (117・8・9) ▲ 文錦堂の番頭のおしやべりをきいてゐた。／番頭は年甲斐もなく、べらべらと厚かましいことを云ふのである。 (47・1) ↓ 文錦堂の番頭のおしやべりをきいてゐた。＜番頭はべらべらと云ふのである。 (117・5・6)

○ 幹旋の労をとるかもしれないスな。 (117・10) △ (47・1) ↓ 幹旋の労をとるかもしれないス。 (117・7)

×私はいつさい風趣を持たぬスわ。なあの女子はスな、(117・11) ▲私はいつさい趣味を持たないスな。あの女子はスな、(47・1) ↓私はいつさい風趣を持たぬスわ。あの女子はスな、(117・8～9)

×あまりに善なるく過ぎるのかもしれない(118・5) △(47・2) ↓あまりに善なるに過ぎるのかもしれない(118・5)

a 思ふてをつてもらひたいス(118・14) ▲思うてをつてもらひたいスぞ(47・2) ↓思うてをつてもらひたいス(118・14)

a 『なに、かくまつてくれと云ふたか』(119・4) △なに、かくまつてくれと云ふたか? (47・2～3) ↓「なに、かくまつてくれと云うたか」(119・6)

○儂はあの番頭に食言した』／しかし先生は云ひなほした。／『と云ふのは、儂の大間違ひぢや。つい儂は、道学者流のごときことを云ふ癖がある』／『先生、窮鳥が懐にはいれば、(119・6～9) △(47・3) ↓儂はあの番頭に食言した』／く先生、窮鳥が懐にはいれば、(119・8～9)

h 太吉の寝所に泊めてもらつたものである。／「一行空き」／土間の奥には藁が堆く、天井にとどくほど積みあげてある。(119・13～14) ▲太吉の寝所に泊めてもらつたものである。／「第47回が終わり、第48回が始まる」移風易俗の章(八)／土間の奥には藁が堆く、天井にとどくほど積みあげてある。(47・4～48・1) ↓太吉の寝所に泊めてもらつたものである。／く土間の奥には藁が堆く、天井にとどくほど積みあげてある。(119・13～14)

h 藁の堆積は森閑としてゐた。／太吉は気をきかせ、(120・5～6) △(48・1) ↓藁の堆積は森閑としてゐた。く太吉は気をきかせ、(120・5)

h それでも何の返答もなかつた。／鶴賓先生は困つたもの(120・9～10) △(48・1) ↓それでも何の返答もなかつた。く鶴賓先生は困つたもの(120・10)

○嘆山先生は幼い塾生のため孝経第十六章の解説につとめ、鶴賓先生の代講をつとめてゐた。(120・13) ▲嘆山先生は幼い塾生のため孝経第十六章の解説につとめ、鶴賓先生の代講を引受けてゐた。(48・2) ↓嘆山先生は幼い塾生のためく、鶴賓先生の代講をつとめてゐた。(120・13)

○『……されば、礼には五つあり。「中略」さう云つて、彼はのろのと立ち上つた。(120・14～128・13) ▲(48・2～51・4。異同については省略) ↓「なし」(120・13～121・1間) 「『有光』で削除されたのは、

『今日』120頁14行目から始まる、孝経第十六章と詩経「園有桃」に関する嘆山の講義の様子、鶴賓が菅茶山と同門であつたこと、二人の前に扉之助が現われて謝罪したこと、また、扉之助の口からヤエノの姉が引田屋の埴輪野であることが明かされる場面である。『満日』では、第48回2段目5行目から第51回末尾に相当する」

【第七齣】121頁～159頁 合計39頁

○献策(半扉 吉田貫三郎画) (129頁) ↓第七齣(121・1)

e 頑丈な帆前船である(130・1) △(52・1) ↓巖乗な帆前船である(121・2)

g しばしば市川市鶴を見物に行つたものぢや、四方赤良は楽屋へ市鶴を訪ねて行つたこともある。(131・3～4) △(52・2) ↓しばしば市川市鶴を見物に行つたものぢや、四方赤良は楽屋へ市鶴を訪ねて行つたこともある。(122・6～7)

c 殆ど聖教の (131・8) △殆ど聖教の (52・2) ↓殆ど聖教の (122・12)

○嘆山先生は思はず微笑した。 (131・9) △ (52・2) ↓嘆山先生は微笑した。 (122・13)

d いま売出しといふ譬へで (131・11) △ (52・2) ↓今売出しといふ譬へで (122・15) ↓ (123・1)

○『なるほど、さうもあらう。では、五山先生は、どの俳優に譬へてをる？』 (131・13) ▲「では、五山先生は、どの俳優に譬へてをる？」

(52・2) ↓「なるほど、さうもあらう。では、五山先生のは、どの俳優に譬へてをる？」 (123・2)

○加藤千蔭は何に譬へてある？』 (131・15) △ (52・3) ↓加藤千蔭は「？」 (123・4)

a 水ぎわの石段へ板を (133・16) ↓ (17) ▲水ぎわの石段へ板を (53・2) ↓水ぎわの石段へ板を (125・10) ↓ (11)

×たゞ国防といふことは (136・15) △ (54・4) ↓ただ国防といふことは (129・1) ↓ (2)

h 鶴賓先生は堅く信じてさう云った。／「一行空き」／『大筒の音がお嫌ひだと申されますのは……』 (137・2) ↓ (3) ▲鶴賓先生は堅く信じてさう云った。／「第54回が終わり、第55回が始まる」献策 (五)／「大筒の音がお嫌ひだと申されますのは……」 (54・4) ↓ (55・1) ↓鶴賓先生は堅く信じてさう云った。／「大筒の音がお嫌ひだと申されますのは……」 (129・5) ↓ (6) 「『満日』第55回の章見出し」献策 (五)「は正しくは」献策 (四)「とあるべきところ。なお、第56回の章見出しは」献策 (五)「とされている」

×嘆山先生は鶴賓先生と並んで歩きながら、 (137・4) △ (55・1) ↓嘆山先生と鶴賓先生と並んで歩きながら、 (129・7)

g 『左様、空砲の音も好かぬが、弾丸を込めた音もすかぬ。』 (137・7) △ (55・1) ↓「左様、空砲の音も好かぬが、弾丸を込めた音もすかぬ。」

(129・10) h 『いや、必ずしも僕は、大筒の音が嫌ひではない』／「一行空き」／大波戸から丸山遊郭へ行く路は、 (139・3) ↓ (4) ▲「いや、必ずしも僕は、大筒の音が嫌ひではない」／「第55回が終わり、第56回が始まる」献策

(五)／大波戸から丸山遊郭へ行く路は、 (55・4) ↓ (56・1) ↓「いや、必ずしも僕は、大筒の音が嫌ひではない」／「大波戸から丸山遊郭へ行く路は、 (131・15) ↓ (132・1)

e 一挺の駕籠が駆けつけて来た。 (139・13) ↓ (14) △ (56・1) ↓一挺の駕籠が駆けつけて来た。 (132・11) ↓ (12)

e もう一挺の駕籠が駆けつけて来た。 (139・16) △ (56・1) ↓もう一挺の駕籠が駆けつけて来た。 (132・14)

a お疲れでみらつしやるんだ』 (140・9) △ (56・2) ↓お疲れでいらつしやるんだ』 (133・8) ↓ (9)

e 無闇に (141・1) △ (56・3) ↓無闇に (134・4)

h 『へへッ』／と頭を下げた。 (141・3) ↓ (4) △ (56・3) ↓「へへッ」

と頭を下げた。 (134・6)

c 駕籠に向かつて (141・4) △駕籠に向かつて (56・3) ↓駕籠に向かつて (134・6) ↓ (7)

○もう陽が沈み、 (141・8) △ (56・4) ↓もう陽が沈み、 (134・10)

がつづいてゐる。出来鍛冶屋町から川境の向ふが(57・1) ↓街がつづいてゐる。／出来鍛冶屋町から川境の向ふが(134・13・14)

○『小生は勝手がわからん。諸事、貴公を見習ふとしよう』／老先生はさう云つて、(142・9・10) △(57・1) ↓「諸事、貴公を見習ふとしよう」／さう云つて、(135・13・14)

d 丁度、お待ち申してをりました。(143・6) △(57・3) ↓ちやうど、お待ち申してをりました。(136・12)

h 『左様、この家の養女といふところで御座いませうな』／「一行空き」／ふと鶴賓先生は聞き耳をたてた。(143・17・144・1) ▲「左様、この家の養女といふところで御座いませうな」／「第57回が終わり、第58回が始まる」献策(七)／不図、鶴賓先生は聞き耳をたてた。(57・4・58・1) ↓「左様、この家の養女といふところで御座いませうな」／ふと鶴賓先生は聞き耳をたてた。(137・8・9) 「『満日』では第58回の章見出し」献策(七)の前に「前回までの梗概」を掲載

c 足を組み合へせ、(145・1) △(58・3) ↓足を組み合はせ、(138・10・11)

d 控への間の仕切りを静かに明け、さきほどの(145・12) ▲そのとき、控への間の仕切りを静かに明け、さきほどの(58・3) ↓控への間の仕切りを静かに明け、さきほどの(139・6)

○ e 豊艷な顔をして、ばちやばちやとしてしかも背が高い。(145・13・14) ▲豊艷な顔をして、どつしりとしてしかも背が高い。(58・3) ↓豊艷な顔をして、ばちやばちやとしてしかも背が高い。(139・8)

g 脚つきの台には、鉢に入れた桃や色のついたギヤマンの湯呑み(145・17) △(58・3) ↓脚つきの台には、鉢に入れた桃や色のついたギヤ

マンの湯呑み(139・11)

a 窓ぎわに立つて行つた。(148・3) ▲窓ぎわに立つて行つた。(59・2) ↓窓ぎわに立つて行つた。(142・4)

h 『ことづけ？ それや無論、ことづけしておいた』／「一行空き」／女はちよつと真剣な顔をした。(148・16・149・1) ▲「ことづけ？ それや無論、ことづけしておいた」／「第59回が終わり、第60回が始まる」献

策(九)／女はちよつと真剣な顔をした。(59・4・60・1) ↓「ことづけ？ それや無論、ことづけしておいた」／女はちよつと真剣な顔をした。(143・2・3)

a 波打ちぎわに、(149・12) ▲波打ちぎわに、(60・1) ↓波打ちぎわに、(143・14・15)

d 女は煙管をとり上げて、吸ひつけ煙草を(150・11) △(60・3) ↓女は煙管をとりあげて、吸ひつけ煙草を(144・15)

a そして窓ぎわの老先生の方を振り向いた。／老先生は窓ぎわを離れ、(150・17・151・1) ▲そして窓ぎわの老先生の方を振り向いた。／老先生は窓ぎわを離れ、(60・4) ↓そして窓ぎわの老先生の方を振り向いた。

／老先生は窓ぎわを離れ、(145・6・7)

g 杓ぬぎにあつたバラ緒の草履をはいて、築山に出た。(151・4) △(61・1) ↓杓ぬぎにあつたバラ緒の草履をはいて、築山に出た。(145・10)

e 駆けつけると老先生の顔を見て、(153・2) ▲駆けつけると、老先生の顔を見て、(61・3) ↓駆けつけると老先生の顔を見て、(147・13)

× 『これはこれは、(153・3) ▲「これはこれは、(61・3) ↓「これはこれは、(147・14)」

× お茶坊子のやうな辮髪詩人(153・14) △(62・1) ↓お茶坊子のやうな辮

髪詩人(148・11)「いづれも『お茶坊主』とあるべきところか」

g 縁側に押し上げるのは、君子の礼でない』(154・1)△(62・1)↓縁側に押し上げるのは、君子の礼でない』(148・14)△(149・1)

×閑吟塾へ伺はせました使者が、(154・12)△閑吟塾へ伺はせました使者が、↓閑吟塾へ伺はせました使者が、(140・11)「『閑吟塾』とあるべきところ」

a 一座の取締りとしておゐになります』(155・6)△(62・3)↓一座の取締りとしておゐになります』(150・7)△(8)

e 有力な仲間が一人また増えたので満足さうに(155・12)▲また一人有力な仲間が増えたので、つい満足さうに(62・4)↓有力な仲間が一人また殖えたので満足さうに(150・14)

○d この二等組を、更らに紅白二組に分離しても、(155・14)▲この二等組を更に紅白二組に分離しても、(62・4)↓この二等組を、さらに紅白に分離しても(151・14)

×彼は髭面のいかめしい顔をしてゐたが、漢文句調はつくなかつた。(156

・17)▲彼は髭面のいかめしい顔をしてゐたが、漢文句調はつかはなかつた。(63・2)↓彼は髭面のいかめしい顔をしてゐたが、漢文句調はつかはなかつた。(152・7)「『今日』は『は』を誤脱」

×水には蛟龍を斬り、陸には豪犀を斬り、(159・15)△▲水には蛟龍を斬り、陸には象犀を斬り、(64・3)↓水には蛟龍を斬り、陸には豪犀を斬り、(155・15)△(1)「説岳全伝第十一回に『凡劍之利者、水斷蛟龍、陸斬犀象』とある。『満日』の『象犀』や『今日』『有光』の『豪犀』は、『犀象』とあるべきところか。あるいは、発話者の『明倫堂の助講格で』『甲府の徽典館から転じて来た秀才』とされる森溪流を揶揄

するか」

×それ君子の廟堂に立つや君主、召して擯せしむるときは、色、勃如たり、足、躍如たり。(161・11)△それ君子の廟堂に立つや一君主、召して擯せしむるときは、色、勃如たり、足、躍如たり。(65・2)↓それ君子の廟堂に立つや、君主、召して擯せしむるときは、色、勃如たり、足、躍如たり。(157・15)△(1)「論語郷党篇に『君召使擯、色勃如也、足躍如也』とある」

×唄はせゝゐるものにちがひない。(162・9)△(65・4)↓唄はせてゐるものにちがひない。(159・1)

【第八齣】159頁～181頁 合計23頁

○早打の注進(半扉 吉田貫三郎画)(163頁)↓第八齣(159・5)

○e 東は亜細亜の果てしまでの大範圍。(164・13)▲東は亜細亜の果てしまでの大範圍。(66・2)↓東は亜細亜の果てしまでの大範圍。(160・6)「『今日』の『大範圍』は『大版図』あるいは『大範圍』など

あるべきところか」

g まさに日本国は、それをば避けるべきこと』(165・1)▲まさに日本国は、それをば避けるべし』(66・2)↓まさに日本国は、それをば避けるべきこと』(160・8)

c 蛙の音が微くにきこえてゐた。(164・4)△蛙の音が微かにきこえてゐた。(66・2)↓蛙の音が微かにきこえてゐた。(160・11)

d と云ふ声でした。(168・14)△(68・1)↓といふ声でした。(164・14)g 卯之助は因幡守に向かひ、畳に頭をすりつけた。(169・3)△卯之助は因幡守に向かひ、畳に頭をすりつけた。(68・1)↓卯之助は因幡守に向

かひく疊に頭をすりつけた。(165・6)

c 豊後守と顔を見合<sub>く</sub>せた。(169・5) △(68・1) ↓豊後守と顔を見合<sub>は</sub>せた。(165・7)

c 豊後守は慌<sub>た</sub>しく云った。(170・10) 豊後守は慌<sub>た</sub>しく云った。△

(68・3) ↓豊後守は慌<sub>く</sub>しく云った。(167・2)

○オロシヤ皇帝の宸翰が、一向<sub>こ</sub>その文意がわからぬ(170・12) △オロシヤ皇帝の宸翰が、一向<sub>こ</sub>その文意がわからぬ(68・3) ↓オロシヤ皇帝の宸翰が、一同その文意がわからぬ(167・4)

○『なに、木ツ葉役人と申した<sub>か</sub>か?』(171・1) △(68・4) ↓「なに、

木ツ葉役人と申した<sub>か</sub>か?」(167・11)

e 羊の皮を鞣した(172・1) △(69・2) ↓羊の革を鞣した(168・14)

「『用字便覧 陸軍幼年学校用』92頁に「皮」は「毛ノアルマ、又ハ體ニツキタルマノ皮。」とし、「革」は「毛ヲ去リタル皮」とする」

e 羊の皮の鞣し皮に、(173・3) △(69・4) ↓羊の革の鞣し革に、(170・

5)

×石ノ港(174・14) △石ノ港<sub>みなと</sub>(70・2) ↓石ノ港(172・5) 「いづれも「石

ノ港」とあるべきところか」

f たまたま国都へテルホルカにて国王の(175・5) △(70・3) ↓たまたま国都へテルホルカにて国王の(172・13)

d 本日引卸しの、オロシヤ船の武器弾薬(176・9) △(71・1) ↓本日引お

ろしの、オロシヤ船の武器弾薬(174・6)

×『申し上げます。たゞいま洞摺乃助ことが、(177・1) ▲「申し上げます

す。ただいま洞摺之助が、(71・2) ↓「申し上げます。たゞいま洞摺

乃助ことが、(174・15) 「『今日』では、これ以前は「洞摺之助」と表

記されていたが、ここから182頁13行目(「早打の注進」末尾)まで「洞摺之助」と誤植される。その次に出現する323頁10行目以降は「風吹洞摺之助」あるいは「洞摺之助」という表記に戻る。『有光』では、この174頁15行目だけが(洞摺之助)と誤植。次の175頁3行目以降は「洞摺之助」とする」

×『洞摺之助とは、そりや何者だ』(177・4) ▲「洞摺之助とは、そりや何者だ」↓「洞摺之助とは、そりや何者だ」(175・3)

c 因幡守は豊後守と顔を見合<sub>く</sub>せた。(177・15) △(71・3) ↓因幡守は豊後守と顔を見合<sub>は</sub>せた。(175・14)

c まだ確<sub>く</sub>で御座います。(178・14) △まだ確<sub>たしか</sub>で御座います。(72・1) ↓

まだ確<sub>く</sub>で御座います。(177・1)

× d 彼は煙草入れ<sub>く</sub>戴いてもとの座に帰り、(179・9) △(72・2) ↓彼は

煙草入れを<sub>く</sub>戴いて元の座に帰り、(177・12)

× その沓脱ぎには、洞摺之助が中間風の(179・13) ▲その沓脱ぎには、

洞摺之助が中間風の(72・2) ↓その沓脱ぎには、洞摺之助が中間風

の(178・1)

×『洞摺之助、待たしてすまん』(179・15) ▲「洞摺之助、待たしてすま

んな」(72・2) ↓「洞摺之助、待たしてすまん」(178・3)

×洞摺之助は沓脱ぎから腰を上げ、(179・17) ▲洞摺之助は沓脱ぎから腰を

上げ(72・2) ↓洞摺之助は沓脱ぎから腰を上げ、(178・5)

×洞摺之助に見せた。(180・3) ▲洞摺之助に見せた。(72・3) ↓洞摺之

助に見せた。(178・8)

g 『こいつ、左様に申して、(180・14) ▲「こいつめ、さう云つて、(73・

1) ↓「こいつく左様に申して、(179・4)



×卯之助と乾分の洞摺之助は、(181・2) ▲卯之助と乾分の洞摺之助は、  
(73・1) ↓卯之助と乾分の洞摺之助は、(179・9)

e人の背の高さの(181・4) △(73・1) ↓人の脊の高さの(179・11)

×卯之助と洞摺之助はその燈火の(181・4) ▲卯之助と洞摺之助は、その燈<sup>とも</sup>  
火の(73・1) ↓卯之助と洞摺之助はその燈火の(174・11)

×洞摺之助の云ふ通り、(181・7) ▲洞摺之助の云ふ通り、(73・1) ↓洞  
摺之助の云ふ通り、(179・14)

×洞摺之助は鼻を持つて(181・12) ▲洞摺之助は鼻を持つて(73・2) ↓洞  
摺之助は鼻を持つて(180・6)

×洞摺之助も浮き立つてゐた。(181・16) ▲洞摺之助も浮き立つてゐた。  
(73・2) ↓洞摺之助も浮き立つてゐた。(180・12)

eたんとお手元へ差上げます』(182・8) △(73・2) ↓たんとお手許へ差  
上げます』(181・6)

×その後ろから洞摺之助が門番に気がねをして、(182・11) ↓その後ろ  
から洞摺之助が、門番に気がねをして、(73・3) ↓その後ろから

洞摺之助が門番に気がねをして、(181・10)

gその後ろから、脱兎のやうな勢ひで(182・12) ↓その後ろ  
ろから、脱兎のやうな勢ひで(181・10) ↓その後ろ

e背の高い男が駈けつけて来た。(182・13) △(73・4) ↓脊の高い男が駈  
けつけて来た。(181・11)

×洞摺之助はびつくりして身構へたが、(182・13) ▲洞摺之助はびつくりし  
て身構へたが、(73・4) ↓洞摺之助はびつくりして身構へたが、(181  
・11) ↓(12)

e背の高い男は卯之助に(182・13) ↓脊の高い男は卯之助

に(181・12)

○「陶量のお座敷」全章(183頁「半扉」) ↓205・16) ▲(第74回) 第82  
回。異同の掲出は省略) ↓「なし」(181・14) ↓182・1間) 「陶量のお

座敷」は以下のような内容である。高島四郎兵衛が引田屋を訪ねると、  
陶量の座敷では、嘆山が阿蘭陀屋敷に出入りする引田屋の遊女(ヤエノ  
の姉・埴輪野。ここでは、その名やヤエノとの関係は明かされず「女」  
とのみ記される) から新兵器の情報を聞き出しているところであつた。

高島四郎兵衛と嘆山との話題は、西洋の各種兵器から、嘆山が提言する  
対露戦略にも及ぶ。そこへ、阿蘭陀屋敷から逃亡した黒人が、引田屋の  
庭に入り込んで一騒ぎになる。」

【第九齣】182頁 ↓201頁 合計20頁

○草書長屋「半扉 吉田貫三郎画」(207頁) ↓第九齣(182・1)

○画料の手金といふわけになりましたスな?』(209・2) △(83・2) ↓画  
料の手金といふわけになりましたスな?』(183・6)

○あの女子なんかわけないスわ』(209・11) △(83・2) ↓あの女子なん  
かわけがないスわ』(183・15)

×覚蔵は早くもほろりして(209・16) △(83・3) ↓覚蔵は早くもほろり  
として(184・5)

○『はて。困ったわい……』(210・16) ▲「はて、困ったわい……」(84・  
1) ↓「困ったわい……」(185・8)

×家のなかにはまる見えである、あるじが見台を前にして端座してゐるのが見  
えた。(211・8) ↓9) ▲家のなかにはまる見えでないで、あるじが見台を前  
にして端座してゐるのが見えた。(84・2) ↓家のなかにはまる見えであ

る、あるじが見台を前にして端座してゐるのが見えた。(185・2・3)

「『満日』の『家のなかはまる見えないで』の『ない』は衍字か。また、『今日』『有光』両者の『家のなかはまる見えである』、『末尾の読点は句点を用いるべきところ』

e 虫くひだらけの (212・1) △ (84・2) ↓ 蟲くひだらけの (185・12)

× さつそくお札に上らうと思ひながら、つい何気なく (212・4) △ (84・3) ↓ さつそくお札に上らうと思ひながら □ つい何気なく (186・15) ↓ 187

・ 1)

c 覚蔵は周章くて云ひ足した。(213・6) △ 覚蔵は周章て云ひ足した。(85

・ 1) ↓ 覚蔵は周章て云ひ足した。(188・5)

c それも筒抜けに聞かえしましたわい。(214・9) △ それも筒抜けに聞かえしましたわい。(85・2) ↓ それも筒抜けに聞かえしましたわい。(189・12)

× 犬の頭骸骨に背骨を一箇つつ丹念に附け足して行つた。(215・8) △ (86

・ 1) ↓ 犬の頭骸骨を一箇つつ丹念に附け足して行つた。(190・13)

「『有光』は『に脊骨』が誤脱。『頭骸骨』は一般には『頭蓋骨』と表記する」

e 背骨は、数珠つながりに (215・9) △ (86・1) ↓ 脊骨は、数珠つながりに (190・14)

h 彼は外に出た。／彼は脇の下に、びつしより汗をかいてゐるのに気がついた。(217・10・11) ▲ とお辞儀をして、外に出た。／彼は脇の下に、びつしよりと汗をかいてゐるのに気がついた。(86・4) ↓ 彼は外に出た。／彼は脇の下に、びつしより汗をかいてゐるのに気がついた。(193

・ 8)

○ 空も青く塗つてゐる。(217・15) △ (87・1) ↓ 空も青く塗つてゐる。

(193・12)

× 犬の骨組みを、そのまゝ (219・2・3) △ (87・2) ↓ 犬の骨組みを □ そのまゝ (195・5)

h 値がよいのと同じ理で御座いませうな』／「一行空き」／神古の先生は、

筒巻きにして持参した絵をひろげた。(219・17・220・1) ▲ 値がよいの

と同じ理で御座いませうな？』／「第87回が終わり、第88回が始まる」草書長屋 (六) / 神古の先生は、筒巻きにして持参した絵をひろげ、

(87・4・88・1) ↓ 値がよいのと同じ理で御座いませうな』／神古の先生は、筒巻きにして持参した絵をひろげた。(196・6・7)

× b 古神の先生は、地球儀を指ざして云つた。(221・2) ▲ 神古の先生は、

地球儀を指ざして云つた。(88・2) ↓ 神古の先生は、地球儀を指ざして云つた。(197・10)

○ 『で、老先生は何んと仰有つたらう』 (223・5) ▲ 「で、老先生は何んと仰有つたな？」 (89・2) ↓ 「で、老先生は何んと仰有つたらう？」 (200・6)

○ 覚蔵は平気で大砲を塗りなほしてゐた。(223・16) △ (89・3) ↓ 覚蔵は

平気で大砲を塗りなほした。(201・1)

e 意気消沈 (223・17) ▲ 意気銷沈 (89・3) ↓ 意気銷沈 (201・3)

○ 「『ヤエノ』全章」 (225頁「半扉」) 249・9) ▲ (第90回・第99回。異同

の掲出は省略) ↓ 「なし」 「文錦堂の番頭丁三郎が漁師原の穀類屋七兵衛店を訪れ、町奴の手から逃れる方便に、娘・ヤエノ (章見出しは「ヤエノ」だが、本文では「ヤエノ」と表記) に美人版画のモデルになる話を持ちかける。ヤエノはその話を承諾し、丁三郎はヤエノを連れて覚蔵宅に向かう。途中で、二人は、間吟塾の鶴賓を訪れようとしていた嘆山

に出会う。突然現われた町奴たちがヤエノたちを襲うが、危ういところを嘆山によって救われる」

○「〔似顔絵〕全章」(251頁「半扉」) 264・9) ▲(第100回〜第107回。異同の掲出は省略する) ↓「なし」 「ヤエノと嘆山が間吟塾近くまで来たところで、町奴たちの手を逃れていた丁三郎が姿を現わす。ヤエノと丁三郎は、間吟塾へ向かう嘆山と別れて、覚蔵の住む草書長屋を目指す。しかし、草書長屋に現われた町奴たちにヤエノは攫われ、比丘尼頭にされてしまう」

○「なし」 ▲(第108回〜第115回) ↓「なし」 「嘆山は、比丘尼頭にされたヤエノを、寄留先の高島四郎兵衛別邸(宅)に連れ帰る。そこへ高島四郎兵衛も姿を現わして、オロシヤ船乗船の段取りを附けたことを嘆山に報告する。ヤエノは嘆山の月代を剃る」

【第十齣】 202頁〜228頁 合計27頁

○駄舌問答「半扉 吉田貫三郎画」(265頁) ↓第十齣(202・1)

f 水之浦陣所を出帆した。(266・1) △(116・1) ↓水の浦陣所を出帆した。(202・2)

×洞の間の薄べり敷きの上に(266・3) ▲洞の間の薄べり敷きの上に(116・1)

1) ↓洞の間の薄べり敷きの上に(202・4)

f 加比丹ズーフ(266・4) △(116・1) ↓加比丹ズーフ(202・5)

c 沖合ひに向くつて差し出した。(266・12) △沖合ひに向つて差し出した。

(116・1) ↓沖合ひに向かつて差し出した。(203・2)

f モルチールにて、(267・3) △(116・2) ↓モンチールにて、(203・7)

「モルチール」はモルチール砲 Mortar (臼砲) のこと」

×如何なる差が御座いますと? (267・4) ▲如何なる差が御座いますか? (116・2) ↓如何なる差が御座いますか? (203・8)

○注文次第にて明年の船に積み入れること(267・17) △(116・3) ↓注文次第にて明年に船に積み入れること(204・6)

c 加比丹に引き合くせた。(268・2) △(116・3) ↓加比丹に引き合くせた。(204・8)

c 『船首のところで、肩を組み合くせてをる数名(271・4) △(118・1) ↓船首のところで、肩を組み合くせてをる数名(208・1)

e 背の高いのが、(271・17) △(118・2) ↓脊の高いのが、(208・14)

e 背の高いオロシヤ人は、(272・1) △(118・2) ↓脊の高いオロシヤ人は、(208・15)

×引き合はせくれと申し出た男(272・3) △(118・2) ↓引き合はせくれと申し出た男(209・2) 3) 「『満日』と『今日』とは

“て”を誤脱」

f 乾分イヴン(272・9) ▲乾分イヴン(118・3) ↓乾分イヴン(209・8)

○オロシヤ随一の港の由で御座います。(272・12) △(118・4) ↓オロシヤ

随一の港の由に御座います。(209・11)

d 検使たち一同は袴の股立ちを取り、(273・3) △(119・1) ↓検使たち一

同は袴の股立ちをとり、(210・4)

f 水之浦陣所(273・15) △(119・2) ↓水の浦陣所(211・1)

f イヴン・ゲレゴロイチ(273・17) ▲イヴン・ゲレゴロイチ(119・2) ↓

イヴン・ゲレゴロイチ(211・3)

d いざ、御案内つかまつる』さう云つて、(274・3) △(119・2) ↓

いざ、御案内つかまつる』さういって、(211・6) 7)

×コルテゲノは審しさに首を振った。(275・6) △(119・4) ↓コルテゲノは審しさに首を振った。(212・12) 「いづれも“不審さうに”とあるべきところ」

c毛織りの服を着て、正面の(275・8) ▲毛織りの服を着て正面の(120・1) ↓毛織りの服を着て、正面の(213・1)

○異国の船わが国への渡来の儀も厳禁の掟とされてある(276・17) ↓277・1) ▲異国の船わが国への渡来も厳禁の掟とされてある(120・3)

↓異国の船わが国への渡来の儀も厳禁の掟とされてある(214・12) 13)

h異国頭官を迎へるための国法にあらず」／「一行空き」／『さりながら、この世に於いて(277・8) ↓9) ▲異国頭官を迎へるための国法にあらず」／「第120回が終わり、第121回が始まる」駄舌問答(六)／「さりながら、この世に於いて(120・4) ↓121・1) ↓異国頭官を迎へるための国法にあらず」／「さりながら、この世に於いて(215・6) ↓7)

eこの事跡は、厳として(278・5) △(121・2) ↓この事跡は、厳として(216・5) ↓6)

f水之浦陣所(280・2) △(122・1) ↓水の浦陣所(218・6)

eカランスタットの鋼鉄の乾児は弥十郎に(280・17) △(122・2) ↓カランスタットの鋼鉄の乾児は弥十郎に(219・8)

×風邪のため、(281・4) △(122・3) ↓風邪のため、(219・12) 「“風邪”ではなく“風”とあるべきか」

e f鋼鉄の鋼鉄の乾児イヴン殿に(281・5) △(122・3) ↓鋼鉄の鋼鉄の乾児イヴン殿に(219・13)

fイヴンは気をよくしたと見え、(281・7) ▲イヴンは気をよくしたと見え、

え、(122・3) ↓イヴンは気をよくしたと見え、(219・15)

f『いま拙者は、イヴン殿に(281・9) ▲「いま拙者は、イヴン殿に(122・4) ↓「いま拙者は、イヴン殿に(220・2)」

×引き合はせる光榮に浴したい。貴殿の前に立つこの人物は、(281・9) ↓10) △(122・4) ↓引き合はせる光榮に浴したい。貴殿の前に立つこの人物は、(220・2) ↓3) 「『有光』の“”は誤植」

fイヴンは驚異の目を見張り、(281・11) ▲イヴンは驚異の目を見張り、(122・4) ↓イヴンは驚異の目を見張り、(220・4)

c不快至極なる気持を味つた(282・11) △不快至極なる気持を味つた(123・2) ↓不快至極なる気持を味つた(221・7)

×クルゼンステルン氏の上位に立つ役人(284・8) △(124・1) ↓クルゼンステルン氏の上度に立つ役人(223・9) ↓10) 「『有光』は“位”とあるべきところ」

g『左様な不心得の人間は、ロンヘルケ氏のほか皆無である(285・5) △(124・2) ↓「左様な不心得の人間は、ロンヘルケ氏のほか皆無である(224・8)」

×加比丹は憤然とした。／『予は貴下の問ひに答へない。予は、使節レザノツト氏に直面する検使一行の一員である』／加比丹は高く靴音を鳴らし、立ち去つた。／イヴンは大きく打ち笑つてから弥十郎を見て、『阿蘭陀人は小人である』／と云つた。(287・13) ↓288・1) ▲加比丹は憤然として、／「予は貴下の問ひに答へない。予は、使節レザノツト氏に直面する検使一行の一員である」／さう云つて、加比丹は高く靴音を鳴らし、立ち去つた。／イヴンは大きく打ち笑つてから弥十郎を見て、『阿蘭陀人は小人である』／と云つた。(125・3) ↓加比丹は憤然とした。／

「予は貴下の問ひに答へない。予は、使節レザノツト氏に対面する検使一行の一員である」／加比丹は大きく打ち笑つてから弥十郎を見て、  
／「阿蘭陀人は小人である」／と云つた。(227・6～10) 「『有光』は、『今日』の傍線部を誤脱」

c 気が荒らくなつてをるらしい御座います』(288・4) △気が荒らくなつてをるらしい御座います』(125・4) ↓気が荒らくなつてをるらしい御座います』(227・13～14)

【第十一齣】 228頁～253頁 合計26頁

○仙台漂民〔半扉 吉田貫三郎画〕(229頁) ↓第十一齣(228・3)

×船首に片寄つた櫓のかげに姿を消した。<まだ下船するのではない。>(290

・1～2) △(126・1) ↓船首に片寄つた櫓のかげに姿を消した。『まだ下船するのではない。』(228・4～5) 「『有光』の『』は衍字」

f イ|ワ|ン(290・4) △(126・1) ↓イ|ワ|ン(228・7)

f イ|ワ|ン(290・6) △(126・1) ↓イ|ワ|ン(228・9)

f イ|ワ|ン(290・10) △(126・1) ↓イ|ワ|ン(229・1)

f イ|ワ|ン(290・13) △(126・1) ↓イ|ワ|ン(229・4)

e 衣服の虫干し(291・1) △(126・2) ↓衣服の虫干し(229・6)

×『さうながら四名の日本漂民は、(291・11) ▲「さりながら四名の日本漂

民は、(126・2) ↓「さりながら四名の日本漂民は、(230・1)

f イ|ワ|ン(292・5) △(126・4) ↓イ|ワ|ン(230・12)

f イ|ワ|ン(292・6) △(126・4) ↓イ|ワ|ン(230・13)

c 毛織りの裾なが服(292・8～9) △毛織りの裾なが服(127・1) ↓毛織く

の裾なが服(231・2)

c 頭が殆んど丸坊主(292・10) △(127・1) ↓頭が殆んど丸坊主(231・3)  
e 目が黒く背丈けが低く、(294・2～3) △(127・3) ↓目が黒く背丈けが低く、(232・14～15)

c 銭を出し合ひして石塔を(296・8～9) △(128・3) ↓銭を出し合ひして石塔を(235・10～11)

×節目をつけてゐなかつた。(296・13) △節目をつけてゐなかつた。(128・4) ↓節目をつけてゐなかつた。(236・1)

e h 『へい』と云つた。(297・3～4) △(129・1) ↓「へい」と云つた。(236・7)

c 手と手を軽く打ち合ひした。(299・2) △(129・4) ↓手と手を軽く打ち合ひした。(238・14)

c オロシヤの女子と云ひ合ひしましたやうな(299・8) △(130・1) ↓オロシヤの女子と云ひ合ひしましたやうな(239・5)

g ペテルホルカの盛場に出かけましてアレキサンドル様の(299・13～14) △(130・1) ↓ペテルホルカの盛場に出かけましてアレキサンドル様の(239・12)

×『その段、神妙ぢや。(301・5) △(130・4) ↓『その段、神妙ぢや。(241・8) 「『有光』は『』ではなく『』を用いるべきところ」

×難題を持ちかけて来た』(302・11) △(131・1) ↓難題を持ちかけて来た。』(243・1) 「『有光』は『』ではなく『』を用いるべきところ」

c 『確くに、それに相違ないな?』(303・7) △「確に、それに相違ないな?」(131・2) ↓「確かに、それに相違ないな?」(243・14)

a 津太夫はあはれて顔をあげて答へた。(303・11) ▲津太夫は周章であはれて顔をあげて



み。 (321・9・10) ▲こゝに参りました」／「第137回が終わり、第138

回が始まる」災厄 (四)／鶴賓先生は青大観の顔を見て、疑はしげに頭をひねつてゐた。 (137・4・138・1) ↓ここに参りました」／鶴賓先生は疑はしげに首をひねつた。 (261・15・262・1)

×不用意な進言をしたげな。 (322・3) ▲不用意な進言をしたさうな。 (138

・1) ↓不用意な進言をしたげた。 (262・10) 「『有光』は誤植」

c 敦圀くことは珍らしい。 (322・9) △敦圀くことは珍らしい。 (138・2)

↓敦圀くことは珍らしい。 (263・2)

d 老先生に申してをるのではございませぬ。 (322・13) △ (138・2) ↓老先生に申してをるのでは御座いませぬ。 (263・6・7)

g 山羊鬚の先きをつまんだまま、大きな嘆息をした。 (323・12) △ (138・

4) ↓山羊鬚の先きをつまんだまま大きな嘆息をした。 (264・10)

○下郎さがれと云ふことぢや』 (323・14) ▲下郎さがれと云ふことぢや」

(138・4) ↓下郎さがれと云ふことぢや」 (264・12)

d つい潔く双の握りこぶしを地に突いた。 (323・15) △ (139・1) ↓つい潔く双の握りこぶしを地についた。 (264・13)

b 青大観を指ざした。 (324・5) △ (139・1) ↓青大観を指ざした。 (265・

5)

e 無闇に (324・6) △ (139・1) ↓無闇に (265・6)

○御座んす次第……』 (324・6・7) △ (139・1) ↓御座んす次第」 (265

・7)

g 『先刻、わつちどもが居酒屋で (324・10) △ (139・1) ↓「先刻、わつ

ちどもが居酒屋で (265・10)

×友誼を故意に曲解する慮外である…… (326・2) ▲友誼を故意に曲解する

は慮外である…… (139・4) ↓友誼を故意に曲解する慮外である……

(267・7) 「『今日』『有光』ともに」は「を誤脱か」

f オロシヤ船の折助イワン (327・5) △ (140・2) ↓オロシヤ船の折助イヴ

ン (268・12)

c 貴官は慌た一どしく激昂いたされるか、 (327・17・328・1) △ 貴官は慌た

だしく激昂いたされるか、 (140・3) ↓貴官は慌たしく激昂いたされる

か、 (269・10)

×それは隣誼を求める国の人とは (328・1) △それは隣誼を求める国の人とは

(140・3) ↓それは隣誼を求める国の人とは (269・10)

c 『殆んど信じられぬ話……』 (328・4) △ 「殆んど信じられぬ話……」 (140

・4) ↓「殆んど信じられぬ話……」 (269・13)

×中小姓……』 (328・8) ▲中小姓……」 (140・4) ↓中小姓……」 (270・

2) 「『今日』は」"とあるべきところを"『に誤植」

e 鶴賓先生は苦虫を (328・10) △ (141・1) ↓鶴賓先生は苦虫を (270・4)

e 町奴どもに洩らす (328・12・13) △ 町奴どもに洩らす (141・1) ↓町奴どもに漏らす (270・7)

もに漏らす (270・7)

g 玄関さきにゐた町奴たちも、胴摺之助を真似て (329・11) △ (141・2) ↓

玄関さきにゐた町奴たちも、胴摺之助を真似て (271・8)

a 偽りを云ふたのぢやらうな?』 (330・1) △ (141・2) ↓偽りを云うたの

ぢやらうな?」 (272・1)

e 奉行所の内幕を洩らしたなら、 (330・3) △ 奉行所の内幕を洩らしたなら、 (141・2) ↓奉行所の内幕を漏らしたなら、 (272・3)

ら、 (141・2) ↓奉行所の内幕を漏らしたなら、 (272・3)

a 悔めることあ御座んせぬ。 (330・10) △ (141・4) ↓悔めることあ御座ん

せぬ。 (272・11)

h『どうか、わつちを縛つておくんなせえ』／「一行空き」／鶴賓先生は念

を押した。(330・14) ▲「どうか、わつちを縛つておくんなせえ」

／「第141回が終わり、第142回が始まる」災厄(八)／鶴賓先生は念を押した。(141・4) ↓「どうか、わつちを縛つておくんなせえ」

／鶴賓先生は念を押した。(272・15) ↓273・1

aありようは、(331・3) △(142・1) ↓ありやうは、(273・5)

e鶴賓先生は山羊髭をつまんで(331・8) △(141・1) ↓鶴賓先生は山羊髭をつまんで(273・10)

○門の外に出て行つた。(333・5) △(142・3) ↓門の外へ出て行つた。

(275・13)

○a町奴が何と云ふたか、あれを貴公も聴いたらう?』(333・6) ▲町奴が

何と云ふたか、あれを貴公も聴いたらう?』(142・4) ↓町奴が何と云

うたか、あれを貴公も聴いたらう!』(275・14)

○何か用事でも御座つたか?』(333・13) △(143・1) ↓何か用事でもあつ

たか?』(276・6)

○『左様、ちくとおたづねいたしたいことがある。(333・15) △(143・1)

↓「左様、ちよ」とおたづねいたしたいことがある。(276・8)

○尚ほ一つにはオロシヤ使節の怒りを解くために一身を殺して(334・6)

7) ▲尚ほ一つにはオロシヤ使節の怒りを解くために、身を殺して(143

・1) ↓尚ほ一つはオロシヤ使節の怒りを解くために身を殺して(277

・1) ↓2)

fナデジタ号(334・15) △(143・2) ↓ナデジタ号(277・11)

×成瀬御奉行所は、(334・17) ▲成瀬御奉行は、(143・2) ↓成瀬御奉行所

は、(277・13) 「『今日』『有光』の『所』は衍字」

aいつか嘆山君の云ふたやうに、(335・6) ↓7) △(143・3) ↓いつか嘆山君の云うたやうに、(278・5)

【第十三齣】279頁 ↓292頁 合計13頁

○離合(半扉 吉田貫三郎画)(337頁) ↓第十三齣(279・1)

×御本邸の奉行人みんなに(338・7) ▲御本邸の奉公人みんなに(144・1)

↓御本邸の奉行人みんなに(279・8)

×□周郎次、えらく上機嫌だな。(338・14) ▲「周郎次、えらく上機嫌だ

な。(144・1) ↓「周郎次、えらく上機嫌だな。(280・4) 「『今日』

は誤つて『』に代えて一字下げる」

cそのお隣りのお部屋で、(339・8) △そのお隣りのお部屋で、(144・2)

↓そのお隣りのお部屋で、(280・12) ↓13)

e畜犬の代りを勤めて啼きだした。(340・5) △(144・4) ↓畜犬の代りを

勤めて鳴きだした。(281・12)

×ほろりとして云ふのである。(340・7) ↓8) ▲ほろりとして云ふのであ

る。(145・1) ↓ほろりとして云ふのである。(281・14) ↓292・1)

○御本宅から、持ち渡り品の(340・11) △(145・1) ↓御本邸から、持ち渡

り品の(282・4)

gほろりとしながら先生のためにお茶をたてた。(341・4) △(145・1)

2) ↓ほろりとしながら先生のためにお茶をたてた。(282・13)

×だが、貴様の妹は、(341・10) △(145・2) ↓だが、貴様の姉は、(283・

4) 「ヤエノに向かつての発話部分。埴輪野を指すので「姉」とあるベ

きところ」

×出向いたのだ』(342・11) △(145・4) ↓出向いたのだ(284・8)



「『有光』は””を誤脱」

c 別離を惜むため (342・15) △ 別離を惜むため (146・1) ↓ 別離を惜むために (284・12・13)

e ところぢやと仰言つた。 (343・4) △ ところぢやと仰言つた。 (146・1) ↓ ところぢやと仰言つた。 (285・3)

a 喜んでおみでになつた』 (343・5) △ (146・1) ↓ 喜んでおいでになつた』 (285・4・5)

× 閑吟塾 (345・9) △ (147・1) ↓ 閑吟塾 (287・12) 「『閑吟塾』とあるべきところ」

× その旨を成瀬奉行所にお伝へすると云つた。 (345・11) △ (147・1) ↓ その旨を成瀬奉行所にお伝へすると云つた。 (287・14) 「いづれも『成瀬奉行』とあるべきところ」

× 胴摺之助の住居に (345・12) △ (147・1) ↓ 胴摺之助の往居に (288・1)

c 『それにしても、慌た』しい。 (346・10) △ 「それにしても、慌た』しい。 (147・3) ↓ 「それにしても、慌た』しい。 (289・2)

e 人間同志 (346・14) ▲ 人間同志 (147・3) ↓ 人間同志 (289・6)

c 組み合せ (346・14) △ (147・3) ↓ 組み合せ (289・6)

× ヤエノ (347・1) ▲ ヤエノ (147・4) ↓ ヤエノ (289・10) 「『有光』は288

頁3行目までは「ヤエノ」と表記

g 『毎度、御苦勞』 (347・6) △ (148・1) ↓ 「毎度、御苦勞」 (290・1)

g 中込卯之助家様といふお武家様が、お先生様に (347・7) △ (148・1) ↓

中込卯之助家様といふお武家様が、お先生様に (290・2)

× ヤエノに云ひきかせた。 (347・15) ▲ ヤエノに云ひきかせた。 (148・1)

↓ ヤエノに云ひきかせた。 (290・11)

× ヤエノは衣の袖で (348・2) ▲ ヤエノは衣の袖で (148・2) ↓ ヤエノは衣

の袖で (290・15)

d 怪たゝましく鳴き交した。 (348・11) △ (148・2) ↓ けたましく鳴き交

した。 (291・9)

× 『些細承知……』 (349・3) △ (148・3) ↓ 「些細承知……」 (292・3)

× ヤエノの尼僧姿 (349・9) △ (148・4) ↓ ヤエノの尼僧姿 (292・10)

【第十四齣】 292頁～311頁 合計20頁

○ 十五夜「半扉 吉田貫三郎画」 (351頁) ↓ 第十四齣 (292・11)

× 老先生の口から或瀬奉行に ↓ (352・7) ▲ 老先生の口から成瀬奉行に (149

・1) ↓ 老先生の口から成瀬奉行に (293・6)

○ 拙者までも偉くお讚めに (352・11) △ (149・1) ↓ 拙者までも偉くお讚め

に (293・10)

d 御奉行へのお取次ぎを名指しで (353・2) △ (149・2) ↓ 御奉行への御取

次ぎを名指しで (293・15)

a 大黒屋におみでになる。 (353・11) △ (149・2) ↓ 大黒屋におみでにな

る。 (294・9)

e 勢ひよく駆け出したが、 (354・8・9) △ (150・1) ↓ 勢ひよく駆け出し

たが、 (295・9・10)

e 駆け出したと思ふと (354・9) △ (150・1) ↓ 駆け出したと思ふと (295・

10)

d 店のなかに案内した。 (355・5) △ (150・1) ↓ 店の内に案内した。 (296

・9)

c お取次ぎ願ひ上げます』 (356・7) △ (150・3) ↓ お取次ぎ願ひ上げま



ひらに『月』といふ字を指で書き空を指くした。(311・11・12)

【第十五齣】 312頁〜232頁 合計12頁

○学而篇第一「半扉 吉田貫三郎画」(369頁) ↓第十五齣(312・1)

×さうして目を閉ぢた。(370・6) △(156・1) ↓さうして目を閉ぢた

(312・7) 「『有光』は”ではなく”を用いるべきところ

aぢつと目をつむつて(371・1) △(156・2) ↓じつと目をつむつて(313・

4)

g是非入用な切開用の針を、どこで手に入れようか思案してゐたのである。

(371・2) △(156・2) ↓是非入用な切開用の針をどこで手に入れよ

うか思案してゐたのである。(313・5)

d先生は云ひなほした。(371・9) △(156・2) ↓先生は云ひ直した。(313

・12)

e駕籠屋は懸声をかけ、威勢よく駈けだした。(371・15) △(156・2) ↓駕

籠屋は懸声をかけ、威勢よく駈けだした。(314・3)

h対岸の阿蘭陀屋敷には、その中庭にそびえる高い柱の上に三色旗がはた

めてゐた。／「一行空き」／嘆山先生は、てくてくと坂路をのぼつて

行つた。(372・10・11) ▲対岸の阿蘭陀屋敷には、その中庭にそびえ

る高い柱の上に三色旗がはためてゐた。／「第156回が終わり、第157回

が始まる」嘆山先生は、てくてくと坂路をのぼつて行つた。(156・4・

157・1) ↓対岸の阿蘭陀屋敷には、その中庭にそびえる高い柱の上に

三色旗がはためてゐた。／嘆山先生は、てくてくと坂路をのぼつて

行つた。(314・15・15・1)

×氣持にびつたりとしてゐるやうに(372・12) △(157・1) ↓氣持にびつた

りとしてゐるやうに(315・2)

c草浦覚蔵のうちの右隣り、(372・13・14) △草浦覚蔵のうちの右隣り、

(157・1) ↓草浦覚蔵のうちの右隣り、(315・3・4)

d金岡寓からきこえて来る声である。(372・14) △金岡寓からきこえて来る

声である。(157・1) ↓金岡寓から聞こえてくる声である。(315・4)

b相成るべくば一貧困苦学の人に(373・3) △相成るべくば、貧困苦学の人

に(157・1) ↓相成るべくば貧困苦学の人に(315・9・10)

○cお隣り金岡寓(373・4) △お隣り金岡寓(157・1) ↓お隣の金岡寓

(315・10)

×閑吟塾主人敬白(373・5) △(157・1) ↓閑吟塾主人敬白(315・11)

「『閑吟塾』とあるべきところ」

c左隣りの神古寓では(373・6) △左隣りの神古寓は(157・1) ↓左隣の

神古寓では(315・12)

d格子戸を明けひろげ、(373・6) △(157・1) ↓格子戸を明けひろげ、

(315・12)

c右隣りの金岡氏を(373・9) △右隣りの金岡氏を(157・2) ↓右隣の金

岡氏を(315・15)

b白い布ぎれで覆ひ、(373・12) △(157・2) ↓白い布ぎれで覆ひ、(316・

3)

×一びきの野兎が(374・2) △(157・2) ↓一びきの野兎が(316・10)

○傷口につけた。(374・5) △(157・2) ↓傷口につけた。(316・13)

aぢつと兎を見詰め(374・12) △(157・4) ↓じつと兎を見詰め(317・5)

cこの間の歩合ひが(375・7) △(158・1) ↓この間の歩合ひが(318・2)

×閑吟塾の老先生に(375・13・14) △(158・2) ↓閑吟塾の老先生に(318・

10) 「『間吟塾』とあるべきところ」

○推定したのにちがひない。(375・17) △(158・2) ↓推定したくちがひない。(318・13)

×g御多忙中のところお邪魔つかまつりました、実は、例の三叉針、あれを一つ古いので(376・7) △(158・2) ↓御多忙中のところお邪魔つかまつりました。実は、例の三叉針、あれを一つ古いので(319・5) △(158・3) ↓「今日」の「御多忙中のところお邪魔つかまつりました、」は

「御多忙中のところお邪魔つかまつりました。」とあるべきところ  
e 鬱血(376・10) △(158・3) ↓鬱血(319・8)  
e 鬱血(376・12) △(158・3) ↓鬱血(319・10)  
e 鬱血(376・13) △(158・3) ↓鬱血(319・11)

×金岡先生はよく光る三叉針を(376・14) ▲金岡の先生はよく光る三叉針を(158・3) ↓金岡先生はよく光る三叉針(319・12) 「『今日』『有光』

ともに、他の箇所と同じく「金岡の先生」とあるべきところ」

c 更らに懷紙で包み、(377・1) △(158・4) ↓更らに懷紙で包み、(320・2)

2)

×h放つたからしておいたも大丈夫」／「一行空き」／嘆山先生は金岡の先生に見送られ草書長屋を出て行くと、(377・5) △(158・6) ▲放つたからしておいても大丈夫」／「第159回が始まる」学而篇第一

(四)／嘆山先生は金岡の先生に見送られ草書長屋を出て行くと、(158・4) △(159・1) ↓放つたからしておいても大丈夫」／嘆山先生は金岡の先生に見送られ草書長屋を出て行くと、(320・7) △(159・9)

×閑吟塾を訪ねることに(377・6) △(159・1) ↓閑吟塾を訪ねることに(320・10) 「『間吟塾』とあるべきところ」

d 障子を明けはなした座敷(377・11) △(159・1) ↓障子をあげはなした座敷(320・14)

g 幼い塾生は、人の足音がしても(377・12) △(159・1) ↓幼い塾生は一人の足音がしても(320・15) △(159・1)

×『俗用……？それはそれ、(378・4) ▲「俗用……？それはそれは、(159・1) ↓「俗用……それはそれは、(321・9)

×近きものは申すにおよばず、(379・7) ▲近きものは申すにおよばず、(159・3) ↓近きものは申すにおよばず、(322・15) △(159・3)

○この心を深く知る人のあらば、(379・9) △(159・3) ↓この心を深く知る人(323・2)

○(完)(379・16) ▲(六月一日脱稿)(159・4) ↓「なし」(323・10)

# 参考文献

- ・国語調査委員会編纂『漢字要覧』(国定教科書共同販売所、一九〇八年五月二十七日)
- ・『修訂大日本国語辞典』(富山房、新装版一二七刷、一九六七年十二月十日。元版一九一五年十月八日、一九一九年十二月十五日)
- ・『新編大言海』(富山房、第十二刷、一九九四年十月七日。新編版一九八二年二月二十八日)
- ・『辞林』(三省堂、中形版第十四刷、一九二四年九月二十五日。中形版初版一九二三年十二月二十日)
- ・『新訂版辞林』(三省堂、第四五〇刷、一九三八年二月二十日。新訂版初版一九三四年三月五日)
- ・『辞苑』(博文館、第一八二刷、一九三八年四月二十六日。初版一九三五

年二月五日)

・陸軍幼年学校編『用字便覧 陸軍幼年学校用』(刊記なし)

国立国会図書館近代デジタルライブラリーで公開されている『用字便覧』(一九一五年刊行と推定)は全七二六頁で、扉には編纂者が「陸軍中央幼年学校編纂」とある。本稿で参照した架蔵本は全七八二頁で、扉には「陸軍幼年学校編纂」とある。六十頁近い増補、また、陸軍幼年学校の変遷、保存状態から判断すると、架蔵本は昭和十年代に刊行されたものかと思われる。

・小川環樹ほか編『角川 新字源』(角川書店、一九六八年一月五日)

・文化庁国語課編『明朝体活字字形一覧——一八二〇年～一九四六年——』上・下(大蔵省印刷局、一九九九年九月二十日)

・新潮社編『新潮日本語漢字辞典』(新潮社、二〇〇七年九月二十五日)

・江守賢治編『楷行草 筆順・字体字典』第二版(三省堂、二〇一〇年十二月二十日)